

2009 年度学科教育点検・評価(FD)報告書

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

2009年度学科教育点検・評価(FD)報告書

時代、状況の変化に対応した教育力の持続的向上は、本学の最も重要な課題のひとつであります。そのために、本学では、定期的に教育内容を点検・評価し、改善すべき課題を明確にして改善を進めております。

この報告書は、2009年度の学科教育について、各学科で点検・評価した結果の報告です。この点検・評価の集約は昨年度から実施しているものであり、以前から各学科などでいろいろな観点で行ってきた点検・評価を、改めて集約し公表するものです。皆様の忌憚のないご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。今後の本学教育改善に反映させていきたいと考えております。

今後も教育力の向上のために恒常的な努力を続けていかなければなりません。報告書がその記録となるとともに、更なる向上の礎となることを願っております。

大阪電気通信大学 教育開発推進センター

学科教育点検・評価(FD)報告書 目次

工学部

人間科学研究センター	1
英語教育センター	11
数理科学研究センター	13
電気電子工学科	19
応用化学科	22
電子機械工学科	24
機械工学科	25
環境技術学科	26
基礎理工学科	27

情報通信工学部

情報工学科	29
通信工学科	31
光・エレクトロニクス学科	33

金融経済学部

アセット マネジメント学科	35
---------------	----

医療福祉工学部

医療福祉工学科	36
理学療法学科	37
健康スポーツ科学科	39

総合情報学部

デジタルアート・アニメーション学科	41
デジタルゲーム学科	44
メディアコンピュータシステム学科	50

添付資料

数理科学研究センター：資料1	53
基礎理工学科：資料	54

学科への要請文	61
---------	----

提出フォーマット	62
----------	----

工学部 人間科学研究センター

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

毎年4月のオリエンテーションにおいて、新入生向けに総合科目の教育目標・位置づけ・学ぶ意義に関するガイダンスを行なっています。その際に学生に配布している文書は、毎年内容を検討して少しずつ変えています。今年度の文書のうち、3. で引用する4を除く部分を以下に引用します。

はじめに ー教養とは何か

総合科目が皆さんに提供することを目指すのは、一言で言えば「教養」です。では、「教養」とは何でしょうか。

古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、その著書『動物部分論』の冒頭で、知識を「専門的学識(エピステーメー)」と「教養(パイデア)」との二つに分けています。「専門的学識」とはある事柄に習熟し、他人にそれを教えることのできる人が持つ知識であり、一人の人間はこの種の知識をごく限られた事柄についてしか持つことができません。一方、「教養」は、ある事柄について他人に教えられるほど習熟はしていないが、それについて語られたことに関して適切な判断を下すことのできる人が持っている知識です。専門的学識と違い、多くの事柄についてわれわれは教養を持つことができるのです。

では、専門的学識だけでなく、教養も必要なのはなぜでしょうか。人間として生きて行くのに不可欠だから、というのがその答えです。

われわれ人間も生きものです。生きものの仕事は生きることです。生きることは環境の中で行われます。環境(あるいは世界)と生きる個体とはさまざまな関係を結びますが、第一に重要な関係は、生きる個体が環境について何事かを知るという関係でしょう。まわりのこと(例えば、食べ物のありかや、自分にとっての危険)を知ることによって、生きものは環境の中で生き延びることができるわけですから。

ここで、限定的な知識(「専門的学識」)を持っているだけでは人間は生きていけないことに注意しましょう。たとえ環境の中で自己の生存にとって最も重要な特定の事物に習熟し、それについて高度な知識や技能を持っていたとしても、それだけで生きてゆくことはできません。それ以外の広範な事物や出来事について適切に判断し、行動する能力があつてこそ人は生きていけます。広範な環境に対するこの知識・判断能力が「教養」です。

人間は他の動物と異なり、自分がその中に生きる環境を重層的に、多様に改変できます。人間を取り巻く環境には、自然、社会、経済、政治、技術、文化などがあり、しかもそれらが複合的に折り重なっています。その中で生きてゆくために、またよく生きてゆくために、人間は広い領域にわたる教養を必要とします。(ただし、必要とされる教養は時代と場所により異なります。例えば、江戸時代の人にとってとわれわれ現代人にとってとは必要とされる教養は違います。)

今日の大学と総合科目を学ぶ意味

1960年代には大学進学率はまだ10～15%ほどであり、立身出世を目指す一部のエリートのためのものだったとも言えます。ところが昨年の大学進学率はついに50%を越え、大学はもはや一部のエリートが行くところではありません。むしろ、大学に行っておかないと、「まともな就職・生活ができないのではないか…」という強迫観念から、嫌でも行かなければならないところになったとも言えます。

※もっとも、現在では大学を出ても正規雇用される確率は低くなっていますから、今後は高い金と労力をかけて無理して大学に行っても仕方がない、ということになるかもしれません。そうならないように、大学で学ぶ意味を明確にしていく責任が大学関係者にはあるでしょう。

このような現在の大学生である皆さんにとって、とくに、社会や仕事に直結した実用的な学問である工学とか理学療法とかゲームのような実学(≡専門的学識)を学ぼうとする皆さんにとって、教養の提供を目指す「総合科目」の必要性はどこにあるのでしょうか。

その答えはなによりも、皆さんが各学部学科で専門的学識を高める学生である以前に、日本あるいは地球という社会の中で生きる一人の人間だから、ということになるでしょう。先に見たとおり、人間は生きてゆくために専門的学識だけでなく、教養も必要とするのです。教養の必要性が、総合科目を学ぶ一つの理由です。

社会という環境を例にとって考えて見ましょう。私たちは絶海の孤島に独りで住んでいるロビンソン・クルーソーではありません。私たちが食べているものも着ているものもパソコンもテレビも車も、私たちのところに届くまでに、原材料の採掘や栽培から運搬、工場での製造そしてまた輸送、販売など実に多くの人々の手を経ています。そのほかにもごみの収集やら電車やバスの運行、警察や裁判所によるトラブルの処理など、きわめて複雑多様な仕組みが網の目のように張り巡らされた社会の中で私たちは生きて、いや生かされているのです。(この点について興味のある人は岩波文庫など何種類も出版されている吉野源三郎『君たちはどう生きるか』を是非読んでください。)大学時代にもそうですが、とくに大学卒業後に一人の人間として、社会人として生きてゆくためには、仕事のために直接に役立つ工学などの専門知識にとどまらない、こうした社会の仕組みや人間関係、人間の心などに関する基礎的な知識や判断力が必要です。皆さんには、今後の生き方の基盤を大阪電気通信大学の4年間で形作ってほしいと思います。将来どう生きてゆくか。総合科目は、いきなり効果が期待できるわけではありませんが、人間としての力の最大の構成要素である「教養」を皆さんが形成することの手助けになります。

総合科目の各群で何を学ぶのか？

さて、生きる上ではなによりも健康であることが大前提になります。総合科目C群ではスポーツ及び健康科学に関する実技と座学が提供されています。その目的は、学生生活の中でのリクリエーションや息抜きの際の提供というだけでなく、社会人になってからも生涯にわたって自ら健康を維持していくことができるための基礎を身につけてもらうことです。同時にそれは、少子化時代の皆さんには苦手な人も多い、ひとつの事をみんなで協調・共同して行う機会、他人とのコミュニケーションの機会を提供することにもなると思います。

いま、コミュニケーションとか協調・共同と言いましたが、実は学生と社会人との大きな違いはここにあると思います。学生時代は気の合う友達とだけ交際していてもすみますし、サボったことのマイナスは自分にふりかかるだけですむかも知れませんが、社会人となればそうはいきません。会社に入れば嫌な上司や同僚とも一緒に仕事をしなければなりません。取引相手の人間が嫌いだといって避けていては仕事になりません。とくに販売店や飲食店、タクシーの運転手のような客商売では、ときにはひどい酔っ払いや実に嫌な客も相手にしなければなりません。自分の不注意や失敗やサボりが同僚や会社やお客などに大き

な迷惑を及ぼすことにもなります。

皆さんがこうした葛藤を最初に経験するのは、卒業研究のときかも知れませんが、恋愛の場合もあることでしょう。恋愛では相手の気持ちを正確に理解し、自分の思いをきちんと伝えるというコミュニケーション能力が大きく試されますし、思うようにならないことも多いでしょう。また皆さんには縁遠いと思われるでしょうが、現在大きな問題となりつつあるのが、これまで家のことを妻に任せっきりにして生きてきた団塊世代の会社人間が大量退職する時期を迎えて、彼らが家庭内や地域できちんとコミュニケーションがとれるだろうかという問題です。「会社人間の常識は社会人の非常識」と言われることもあります。皆さんには同じ過ちを繰り返さないようにしてほしいと思います。

これらのための具体的なノウハウまで大学で教えるわけではありませんが、その基礎となるのが、人間の多様性や心理の複雑さや複雑な社会に関する理解であり、これを扱うのが総合科目A群です。すぐれた文学は人間の複雑さや多面性、社会の複雑さを具体的な姿で教えてくれますし、教育学や心理学は人間の内面・心理について、法学や政治学、経済学などは現代社会の諸相について客観的・科学的な分析を提供し、そこにどのような問題があり、どのような解決の途があるかを考えさせてくれます。歴史学もたんなる興味から過去のことを調べるわけではありません。現在の社会が抱える諸問題を考えるヒントを人間の過去の経験から学ぼうとするものです。哲学はこれらの学問すべてに関わって、その根源的な問いに答えようとするものです。

現在では仕事の場面でも、地域の隣人としても、また観光旅行の場合などにおいても、外国人とのコミュニケーションの機会が増大しています。その基礎は当然ながら外国語の能力(総合科目B群)であり、英語だけでなくそれ以外の外国語も是非積極的に受講してほしいと思います。しかし、外国人と日本人が異なるのは言葉だけではありません。日本の常識がそのまま諸外国で通じるとは限りません。食事や生活習慣などさまざまな違いがありますから、その違いを知らないと、ときにはほとんどない誤解を生み、敵対的な関係が生じてしまうこともあります。アメリカに留学していた高校生の服部剛丈(よしひろ)君は、**1992年10月**、ハロウィンの仮装をして他人の庭に間違っただけで撃ち殺されてしまいました。しかも陪審裁判では被告人の正当防衛が認められて無罪となりました。諸外国の文化や考え方を知ることによって、日本社会の特殊性や、その優れたところや逆に劣ったところが再発見されることにもなるでしょう。

日本語の能力は、あらゆる学問・科目の、というよりも人間の思考の基礎です。私たちは言葉によって考え、また人とつながっています。きちんとした日本語能力がなければ論理的思考はできませんし、例えば数学などの理系の試験問題でも、問題文の意味が正確に理解できなければ正しい答えが書けるはずはありません。「日本語上達法」は、書かれた文章を正確に理解し、自分の伝えたいことがきちんと相手に伝わるように、文を書いたりみんなの前で報告をしたりすることで、日本語によるコミュニケーションの基礎を学ぶ機会を提供する総合科目です。

幅広い教養や人間関係を持ちえず、人間性や人間社会の複雑さを理解できない理系エリートが、教えや悟りによってこの世の悪や悩みを解消できるとする宗教を妄信して重大な犯罪を引き起こしたこともありました。また今日では、いわゆる「専門バカ」では専門家としても役にたたなくなってきました。創造的な仕事を行うためにも、広い知識や教養に裏づけられたゆたかな人間性や個性がますます求められるようになっていきます。

受講上の注意

日本では親や教師の言うことを素直に聞く子どもがよい子だという考え方が今なお強いように思うのですが、最後に強調しておきたいのは、これからは「自分の頭で考える」ことを常に心掛けてほしいということです。すなわち教師の講義を聞く場合にも、教科書を読む場合にも、その内容を鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考えながら批判的に聞いたり読んだりすることです。教師の講義や教科書にも誤りもあるし説明が不十分な場合もあります。自分自身が十分納得でき、理解できているかどうか重要です。「考える」ことこそが学生の、いや人間の本分です。

その点に関わっては、○か×か、正しいか間違っているか、善か悪かという単純な二者択一の思考もやめてください。受験教育あるいは日本の学校教育それ自体の弊害という点もあると思うのですが、大学受験までの勉強では、すでに回答・解答が見つかっていて、しかもそれが一つという範囲のものがほとんどでした。ところが大学で研究され講義されている学問では、理系でも文系でも先端分野であればあるほど、回答・解答が見つかっていない、あるいは答えがいくつもありえて、どれが正解だとは簡単には決められないものばかりです。一人の人間の中に善と悪、利己・利他などの多様な側面が存在します。現実の人間社会はこうした複雑で多様な人間の利害・欲望や、さまざまな理想・理念のぶつかりあいによって形成されているのですから、非常に複雑です。そして法学や経済学などの社会科学とはこのような人間社会それ自体を前提とし研究対象とするものです。ですから、賛成・反対のさまざまな意見に分かれますし、簡単に決着がついたり全員の考え方が一致したりするものではありません。したがって、一見するとこうした学問はアイマイでいいかげんなものに見えるかも知れません。しかし、現実社会の複雑さを理解できずに単純に割り切ろうとする、または割り切ることができる则认为るナイーブさ＝単純素朴さ・子どもっぽさのほうにむしろ問題なのです。

以上の説明からわかるように、とくに総合科目A群に関しては、大学の講義だけが勉強の機会ではありません。新聞や雑誌、テレビやラジオのニュース、あるいはインターネットなど、できる限り多様な手段・機会を利用して、現実の人間社会で何が起きているのかについて常に気を配り、情報を入手するようにしてください。ただしマスメディアと異なり、インターネットの情報は誰でも発信できるのが利点でもありマイナス面でもあります。他人によるチェックを受けないままに「素人」が書いていますから、誤りや偏向が含まれている割合が高いのです。可能な限り多様で多面的な情報に接することにより、どの情報が正確で適切かを自分の頭で考えて見分けていくことが、他のメディアの場合以上に必要となります。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

毎年度4月はじめに、前年度の教育の総括・反省と、今年度のすすめ方等に関して非常勤講師と専任教員との懇談会を行なっています。今年は4月10日土曜日の午後4時から5時半頃まで行ないました。その記録(の要約)を以下に紹介します。

(1) A群講義科目

教室いっぱいを受講生数が多すぎる授業では集中できないだろう。

S学科の学生が多い授業はどれも騒がしい。静かすぎると理解しているのか心配になることもあり、静か

であれば問題がないと考えているわけではないが。

一昨年度は待ち合わせの場所に授業を使う学生がいてざわざわした。遅刻者だからといって排除はできないが、「受講しているのか」と問い詰めたこともある。昨年度は私語でストレスを感じたことはなかった。

他大学では人数がすごく多いので、比べられるかどうかは分からないが、授業の規模としては、私語する子に注意しながらできる程度だと思う。

うちの大学で、300人とか500人の授業は成立しないと思う。

四條畷では受講登録が160人。出席者は50～70名。試験を受けたのは110名。

質問に来る学生は少ない。

(2) 施設・設備について

J号館は縦長で平らな教室だが、不満などないか。

→ 縦長の教室は板書の字が見えない、スクリーンの下部が見えないとの不満が学生から出ている。

C305はどうか。

→ 最悪という声多数

AV機器などについて不満・要望はないか。

→ J号館の小さい部屋はいちいち運ばないといけないので不便だ。また机をどかして設置しなければならず、使いにくい。

→ 縦長の教室の半ばにあるモニターも、授業のときには使いにくい。スクリーンと先生が離れすぎると教育効果上よくない。会議なら別だと思うが。

→ 教室の設計時に、教職員の意見を聞いていないからこんなことになるのではないか。

→ バリアフリーも不十分ではないか。点字ブロックがない。薄暗い場所では見えない。人の手当がないので、ノートテイクなどもない。

四條畷のソファのある非常勤講師控え室は、むしろ普通の長机といすの方がいい。講義の準備作業ができるように。

寝屋川のパソコンは古すぎる。四條畷にはそもそもない。

講師控え室のパソコンに(パスワード入力でアクセスして)USBメモリー等を使ってパワーポイントなどの講義資料をインストールしておけば、教室のパソコンで使えるような、文系の大学でも導入されているシステムを導入してほしい。「電気通信」大学という名が泣いている。

(3) 学生の抱える種々の困難について

一生懸命聞いているようなのに、試験のときにまったく書けない子が寝屋川にいた。思い出してみると、質問の1文が非常に短かった。自分の回答が長文で、分からなかったのではないかと思う。

発達障害といわれても分からないことがあるので、教えてもらわないといけない。

具体的な学生の名前を挙げて、話ができればいい。

医者のように診断はできない、カウンセラーの立場では、「〇〇と判断される」としか言えない。また、マンツーマンの方法論しかないので、集団での教育は経験的に進めていく、作り出していくしかないのではないか。それが重要だ。

学生の特徴を分からないまま、きつく注意する先生もいる。

授業担当者は困難をもった学生は分かるのではないか。授業の途中段階に教員同士で共有できるようにした方がいい。5月の半ばごろにやるべきではないか。

切れやすい学生、ずるがしこい学生、いろんな学生がいる。いろんな情報を共有するべきだ。

来なくなっている学生、授業を受けていても成績が上がらずむしろ下がる学生の情報なども共有するべきだ。

→ この情報交換を5月の下旬にした方がいいのではないか。

→ 前期も後期もやった方がいいのではないか。前期の授業が少ない先生、ない先生もいる。

年度初めのこの会とは別に、年度の途中にもやろう。

→ 5月の中・下旬、11月の上旬ではどうだろう。大学祭のころがいい。

→ 参加できなかった教員にも、後日情報を伝えてほしい。

(4) 演習形式の教職総合ゼミ + 日本語上達法

欠席はしない、しかし私語が多い。

講義室のような固定椅子の大きな教室ではゼミがやりにくい。口の字型に机と椅子が配置された30人程度の教室が望ましい。

(5) 英語以外の外国語

連絡事項 2011年度に向けたカリキュラム改定について

CAP制(一年間に取得できる単位数の上限を定める)とクォーター制(一学年度を四分分割)

※ 今夏までに策定委員会により大枠が決まる。現在のところ第二外国語に関する変更は聞いていないが、備えは必要。大学教育における第二外国語の必要性に関する十分な先行研究がないため、非常勤教員にも意見・資料提供など、できる範囲で協力願いたい。

議題 二年生・三年生の履修者を一定数確保するための方法について

問題提起: 現行のカリキュラムになって、二年生・三年生の履修者数が減少したように思われる。

原因: 90分授業半期が1単位から2単位へと二倍に増えたため。

英語でも構わないため。

複数の言語の1, 2ばかりを取っていく学生がいるため。(→とりやすいから?)

5限に開講されているため。

対策: 案1 複数言語の初級のみを履修するような意欲のない行動を禁止しては。

→ 意欲的であるがゆえの行動の場合もある。

複数言語を広く浅く学ぶ流れは、他学においてトレンドになっている一面もある。

案2 一年生の授業を5限に、上学年の授業を4限までにもってくることはできないか。

→ できるかもしれない。事務の時間割作成担当者と相談する。

案3 必修の前後など、学生にとって履修意欲が高まる時限にもってくることはできないか。

→ 学科ごとの時間割の決定過程との兼ね合いがあり、難しいが、相談する。

案4 一年生に、次年度以降も履修するよう、一年生の担当教員が働きかける。

→ 賛成

- 案5 統一教科書を用いて、一年生で半分、二年生で後半の半分を学ぶ。
→ 今後の検討課題とする。

要望・意見

→ クラスの人数が多すぎる。複数の学科がクラスになっていると、レベルの差により、授業が困難。

(6) C群

1 総合科目とC群について

- ・基本的に学科ごとに開講しているが、80名を割る学科については合併にて開講している

2 スポーツ実習の履修登録と受講クラスについて

- ・受講人数(90名以上は2クラスに分ける、少ない場合は学科合併等)
- ・実施内容と人数制限

グラウンド:40名(雨天等の場合、学生会館で卓球ができるように)

ボウリング:ボウリング場営業時間外(1限目など)は40名、通常25名

卓球場:24名(台が6台しか入らないので1台につき4名を基本としている)

※ただし、許容を超える学生が受講を希望した場合は、担当者の裁量で数名を超えて受け入れる場合がある。

3 授業の目的について確認

コミュニケーション能力の向上(教員と学生とのスキンシップ、学生同士の交流)

発達障害等の学生の扱い(TAの申請可能)

※上記学生が増えている傾向にあるため、注意すること

4 名簿について

→ 問題点:登録していても出席しない、決定クラスへ修正していないなど

→ 改善点:体育事務員西山と高橋が決定者名簿を作成し、教務課に提出する。この決定者名簿に載っていない学生は教務課にて削除する。

※初回欠席の学生について:掲示で呼び出しクラス配分(4月23日締切)

5 スポーツ実習受講上の留意点

- ・眼鏡、コンタクトレンズに注意を促す
- ・ボウリングクラスは移動があるので注意(ロッカー利用等のアドバイス)

6 各クラスの授業要領と用具について

グラウンドクラス

- ・実習1および2:種目を期間分割して実施する(2種目)。団体種目を通しての気遣いやコミュニケ

ーション力の育成を主眼に教授する

- ・実習 3: 自主運営できるよう運営の仕方を教授(複数種目並行実施可)
- ・実習 4: スポーツの自主運営(マネジメント)できる基礎となるように

ボウリングクラス

- ・曜日担当のインストラクター変更の連絡
- ・教員がプログラムや技術指導を主体的にやっていけるように努力する

卓球クラス

- ・マシン新規購入の連絡
- ・卓球場の設備変更の連絡(荷物置きや下駄箱、作業機など)

7 授業中の負傷事故について

- ・グラウンド内に内線電話設置
- ・傷害保険請求書類について: 教員が事故状況について記入する
→ 授業中のけがは細かいことでも報告させるように

8 成績評価について(しおり pp.6)

- ・しおり 8 ページの項目 15「スポーツ実習評価基準表」について
→ 諸事情につき数年前から、出席点を 70 点から 50 点に変更(教員点は各自の裁量で)

9

- ・卓球クラスについて、熟練者とその他の学生との差に苦慮(例: カットサーブが返せない)
→ 中級・初心者が発散できない。
工夫点: 思い切りスマッシュする時間を作る
大声を出す(周りにも声を出すよう盛り上げ)
初心者同士だと続かないので、マシンを活用する
カットサーブの受け方の特訓
腕立てや腹筋等を授業最後に入れていく
ボウリングクラスのよさ(すぐに仲良くなれる)
- ・やんちゃと真面目と、徐々に派閥ができてしまう
→ いろいろな人と組ませよう工夫
- ・1年次に実技を担当した学科生を2年次に講義で担当したが、実技と講義の関連付けができてよかった。
- ・1年生と3年生とを比べると、やはり3年生の方が盛り上がる。
- ・工夫点(卓球): 毎回学生の組み分けを変える。
台ごとに課題を設定する。
熟練者と初心者を組み合わせ、ラリーが続くようにする。
- ・工夫点(ボウリング): ボウリングは記録を付けるようにする。
実習 1 と 3 との差別化(進行に合わせて資料配布)をおこなう。

- ・グラウンドクラスはやんちゃだが、よく動く。
チーム作りに工夫:まず動いてみて、2〜3週かけて徐々にチームを固定(接戦となるように)
- ・1年生は怪我のリスクが高い。
(例)キャッチボール中にボールを顔面で受ける。
サッカー中にキック後つまづく。
→ アップにコーディネーショントレーニングを入れて体づくりをおこなっている。
- ・毎時間異なるタスク(課題)を設定している。
- ・4年生の授業で学生をコントロールするのが難しかった。
(例)アップもそこそこに、勝手にゲームをやってしまう。
- ・体育館種目の授業経験はあるが、ボーリングはどうなるか分からない。
- ・卓球クラスは動きたくない学生が多い。
→ 必ず授業前にランニングをおこなった ※習慣化させるとよかった。
※その他、体づくり、ストレッチなどを導入で行った。
- ・コミュニケーションを重視し、学生に合わせグループ作り、目標設定をした。
※自分の事を発表させる機会も作った。
- ・昨年度、発達障害と考えられる学生が3名もいた。特に一人は攻撃的だった。
→ 学生相談室と協力して対応する。
→ 授業内容や約束事などを全て書き出して一緒に見る。
→ 他の学生の理解も得、よく協力してもらわなければならなかった。
※他の学生にとっては課題のレベルが下がってしまったかもしれない。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

1. で掲げた新入生向けガイダンス配付資料の「4 科目選択上の諸注意」を以下に掲げます。

(1) A群科目

A群では、多種多様な科目が開講されていますので、できるだけ広範な領域から科目を選択し、計画的に履修するように心掛けて下さい。

また、科目によって受講人数に制限を設けている場合や、同じ科目名であっても開講時限や担当教員が異なる場合がありますので、『教授要目』を熟読するとともに、必ず履修登録をしたクラスで受講してください。

(2) 英語以外のB群科目(外国語)

英語以外のB群には、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語があります。ただし、フランス語は寝屋川キャンパスだけで、韓国語は四條畷キャンパスだけで開講されています。ドイツ語と中国語は寝屋川・四條畷の両キャンパスで開講されています。

ドイツ語、フランス語、中国語は、授業で使用する教科書が先生ごとに異なりますので、間違っても別の教科書を買わないためにも、第1回目の授業に必ず出て、各先生の指示に従ってください。

英語以外の外国語を新たに学ぼうとする人は、できる限り前後期を通して受講するようにしてください。

(3) C群科目（スポーツ）

C群のスポーツ実習科目については、第1回目の授業の際に、ガイダンスを行いますので、必ず出席してください。グラウンド、ボウリング、卓球のクラスのそれぞれに定員があり、クラスへの振り分けをしなければなりません。もし第1週目に欠席すると、クラス配置ができません。その場合には受講できなくなることがあります。

(4) 教職課程

教員免許状を取得するための課程です。2回生以降に履修できます。

教職課程の履修を希望する者は、「教職課程履修希望者への事前説明会」に出席する必要があります。事前説明会は1回生の後期に実施されます。（2回生以降にも実施されますが、教職課程は科目数が多いので、なるべく1回生のうちに参加し、2回生から履修できるようにしてください。）詳細は、教職課程の掲示板（※学科の掲示板とは別です）に掲示されますので、履修を希望する者は必ず教職課程の掲示板を見てください。

なお、『学修必携』（茶色の冊子）の「14.教職課程」（pp.73-120）、「(10)教職課程 ア. 2010年度からの教育課程」（pp.274-275）に、教職課程履修についての重要な内容が書いてありますので、履修希望者はよく読んでおいてください。

4．卒業研究指導について

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

6．添付資料

特になし

工学部 英語教育センター

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

本学では、学習者が実用性のある英語力を養成するための授業を展開することを英語教育の目標とする。具体的には、次のような力を身につけさせることである。

- a. 辞書を手元におけば各種マニュアルや専門領域の文献が読める。
- b. 聞いている人が理解できる程度に音読ができる。
- c. 日常的な場面にて英語を使ってコミュニケーションができる。
- d. 英文でメールの交換ができるなど、英語を使って自己表現ができる。

これらのうち、a, b を本学の学生が最低身につけるべき「基本的な英語力」と位置づけ、科目である「英語リーディング」を1年次、2年次、3年次に配当している。また、c, d については「英語の応用力」として位置づけ、個々の学生の学習意欲と能力に応じて受講できる科目を設定している。例えば「TOEIC 特別セミナー」、「英語コミュニケーション」、「英語特別セミナー」である。これらは自主学習型授業である。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

・新入生に対し、4月のオリエンテーション時にプレイスメント・テストを実施し、レベル別にクラス分けし、それぞれのレベルにおいて統一教科書を採用。統一教科書に関しては内容評価を行い、次年度以降の指導課題についての議論をもとに、継続使用の可否を検討している。

・新入生の履修も多い英語科目において、携帯出席システムを積極的に使用することにより、出席状況の情報が担当学科と共有できるように改善を目指した。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

・平成21年3月25日:2・3年次配当科目である「英語コミュニケーション(目的別学習コース・会話コース)」履修にむけてのガイダンスを実施した。さらに、少人数教育を目指す英語コミュニケーション(会話コース)の履修者の抽選もあわせて行った。

・入学時におけるオリエンテーションで英語学習に関するガイダンスを実施し、本学での英語学習の概要について新入生の理解を深めた。

4. 卒業研究指導について

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

・2010年2月8日、9日、UBCでの語学研修参加学生を対象に、特任講師による事前対策プログラムを実施した。

・寝屋川・四條畷両学舎にて英語学習支援室を開室し、「ランチタイム英会話」として課外レッスンを提供し、少数ではあるが、英会話に関心のある学生のニーズに応えている。

・英語に対する苦手意識を持つ学生を対象に、基礎的な学習支援的レッスンを課外学習として提供した。

2009年度は、前期・後期あわせて20回程度の学習支援(一回の学習時間は15時から18時までの3時間)をR号館2階の英語学習支援室において行った。掲示による募集に力を入れたため、参加した学生は10名を超えた。英語が苦手という学生から、もっと英語力をつけたいという学生まで、さまざまなニーズがあったが、個別指導という形で対応することで、それぞれの学生のニーズに合った学習支援を実施することができた。若干名ではあったが、毎回連続的に参加して、意欲的に英語学習を進めた学生もいた。

また夏季には特別プログラム(二時間×三日間)を実施し、前期に成績の振るわなかった学生約10名を対象に、基礎英文法の講座を開催した。ただし語学学習において、短期集中型のプログラムではあまり成果が見られないようなので、2010年度は、前述の英語学習支援の方を発展させていく方向で考えたい。

さらに大学院生のひとりから英文法の復習および英作文の指導に関する依頼があり、対応している。英文法に関しては個別的に指導し、英作文に関してはEメールでの添削を実施している。メールでの添削はこの学生からの提案であり、現在のところ、首尾よく学習を進めることができている。まだ試行錯誤のプログラムのため、今すぐ参加者の人数を増やすということとはできないが、将来的には規模を拡大させる方向で考えたい。

・平成21年11月17日「TOEIC 支援プロジェクト」実施:就職活動でも有利となる TOEIC を受験する学生、大学院生を対象に DS や e-Learning を活用した個別コーチングを行った。受講生の中には、その後 TOEIC テストを受験し545点を取得した P 学科の学生もいた。

・平成21年12月8日及び12月15日「アルクネットアカデミーオリエンテーション実施」自宅からもアクセスが可能な e-Learning ソフトネットアカデミーの効果的な学習方法を、学生、大学院生対象にオリエンテーションを実施した。

・2010年2月15日～18日(4日間)「英語プレゼンテーション講座」を MC2 と共同主催:学部生、大学院生を対象に、ネイティブ講師(ベルリッツ)による英語プレゼンテーション講座を実施した。参加者にとっては英語学習へのよい刺激となったようである。

6 . 添付資料

特になし

工学部 数理科学研究センター

数理科学研究センター(ASセンター)は本学理工系の学部・学科において、共通の基礎科目として区分されている基礎専門科目のうち、数学科目と物理・力学科目を担当している。数学関係科目としては、基礎解析・演習、微積分1・演習、微積分2・演習、微積分3、多変数の微積分、線形代数1、線形代数2、応用解析、確率・統計がある。また、物理・力学関係科目としては、物理学1・演習、力学1・演習、力学2、基礎力学、物理学1・演習、物理学2、基礎物理学、物理学・実験、熱学、現代物理学入門がある。

このうち、数学関係科目は学部・学科によらないほぼ統一的な科目配置を行っているが、物理関係科目は学部・学科の特色に応じた科目配置になっている。これは、理工系の学部・学科に共通な基礎数学の習得を目指していることと、専門科目とのつながりを考慮した物理・力学の学習を目指していることによる。

これらの科目群は、本来的には、工学部・情報通信工学部などの工学系学部の共通科目として設置されている科目であるが、
の学部・学科に対しても個々の学科の要望により上記科目の内その一部を提供している。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

A. 数学関係科目

本学数学教育科目における第1の目的は、専門科目を修得するために必要な数学的表現を理解し定理や公式を運用出来るようにすることである。特に理工系の学生が学ぶべき数学の基礎的事項である微分積分学や線形代数学は完成度の高い、整備されたものであるから、これらを習得させることは、各学科の専門における物理学および工学系科目の履修・修得に供することにつながり、重要な目標となる。さらに、2年次で開講している「応用解析」「微積分3」「確率・統計」などはより直接的に専門科目と関わっていることは言うまでもない。

第2の目的は、数学教員免許取得希望者や卒業研究において数学を希望する学生、あるいはより高度な数学を必要とする大学院進学希望者に対し、それぞれの目的に応じて数学の諸分野の知識を身に付けさせることである。

第3の目的は、間接的なものであるが、数学が本来的にもっている論理的整合性や合理性に慣れ親しませることである。このことは、単に手段としての数学知識を習得するためだけでなく、数学的なものの考え方を身に付けることにより、広くこの世界を理解し、社会生活を送るための重要な糧につながる。

上記の目標に従い、初年次生に提供される微積分関係科目(基礎解析・演習、微積分1・演習、微積分2・演習)と線形代数関係科目(線形代数1、線形代数2)を特に重要度の高い科目と位置づけている。すなわち、従来のようにいきなり微積分から始めるのではなく、入学してくる学生に応じて、三角関数や指数・対数関数の理解を十分に行ってから微積分の修得を目指すシステムを取り入れている(基礎解析・演習)。さらに、微積分1・演習においても上記基本関数の復習を行ってから、関数の極限計算、導関数の計算へと進む。このことにより、微積分1・演習においては、通例不定積分の計算までが目標となる。したがって、微積分2・演習(あるいはダイジェスト版である多変数の微積分)では、1変数の積分を復習しながら多変数の微積分に入ることになっている。

また、線形代数においては、いきなり概念的な項目から始めるのではなく、線形代数1では(行列の基本

変形や行列式の計算など)計算方法の習得をメインにしたシラバスになっている。これにより、線形代数の基本的な目標である線形変換や固有値・固有ベクトル・行列の対角化(線形代数2)の習得にスムーズに入れるよう工夫している。

B . 力学・物理学関係科目

力学・物理学関連の基礎専門科目の目標は、物理学の基礎について正確な知識を受け、日常の現象に対して物理学的な見方を養い、関連する専門科目の学習への意欲と能力を育てることである。

近年、ますます顕著になってきている新入生の学力レベルの格差への対策として、「力学」「物理学」において導入されている習熟度別クラスによる講義・演習は今年度で 9 年目を迎えている。この間、学力レベルに格差のある学生に対する教育の実践に努め、ある程度の教育効果を得ることができた。

現在のカリキュラムが導入されたのは 2006 年度である。旧カリキュラム(2000 年度～2005 年度)から新カリキュラム(2006 年度)への改訂に至る詳細は「2005－2006 年度 教育研究センター年次報告」に述べられているので、ここでは概略のみ述べる。

2006 年度のカリキュラムの特徴は、それまで各学科に配置された 1 年次前期・後期の力学・物理学科目の基本コースは全て共通であったが、これを学科の特徴を生かしたコースに分けたこと、2 年次前期にさらに進んだ内容(アドバンス)の講義を用意したことである。これまでの基礎専門科目はいわゆる古典物理学の範囲に限られており、現代物理学に関する内容を教授する機会は全くなかったが、現代物理学(量子論・相対論を含む)は最先端科学の基礎であり、本来工学部在学中にどこかの講義で扱うべき項目であるという考えに基づいている。学科、コース毎に纏めたカリキュラムを以下の表に示す。

表 2006－2009 年度カリキュラム

学科	1 年前期	1 年後期	2 年前期/後期
EGF	★物理学 1・演習[2 コマ連続]	★物理学 2 物理学・実験	EG 現代物理学入門
JH	★力学 1・演習[2 コマ連続] 物理学・実験	力学 2, ★基礎物理学	J 熱学
ZN	★力学 1・演習[2 コマ連続]	★基礎物理学, N 力学 2 物理学・実験	N 熱学 /N 現代物理学入門
P	基礎力学	基礎物理学	
L	力学 1・演習[2 コマ連続]	力学 2 基礎物理学	医用物理学
S	力学 1・演習[2 コマ連続]		

★印は習熟度別クラス編成科目

現在の習熟度別クラス分けは、2006 年度のカリキュラム改訂の際に実施した方法に従っている。習熟度の判定には、入学時の新入生全員を対象にした「数学プレイズメントテスト」の結果と、高等学校における物理学の履修状況アンケートを用いている。数学のプレイズメントに基づくクラス分けが十分に物理学に対応しているわけではないが、現状での新入生の物理の履修状況を考えると実施は困難であろう。習熟度クラスは EGF と ZN 群では3段階に、HJ 群では2段階に編成されている。特に高校の「物理」を全く

履修してこなかった学生であっても初めから学ぶことができるように配慮している。なお 2008 年度に新設された医療福祉工学部健康スポーツ科学科の初年度はL 学科と合併でクラス分けをしていたが、2009 年度からは各学科別のクラスに変更した。 キャンパスにおける力学・物理学関連科目のあり方が検討されていかなければならない。

「物理学・実験」は、物理現象との接触を通して原理の理解を深めながら、工学諸分野を専攻するのに不可欠な基本的実験操作や測定値処理法の習得を目的としており、工学部(EGHJN(Zを除く))および情報通信工学部の通信工学科(F)では必修科目である。環境技術学科(Z)も必修ではないが、学科の方針として強く受講を勧めているので、ほとんどの学生が受講している。また、誰が読んでもわかるレポートの作成も重要な課題の一つである。

力学、物性、熱学、光学に関する実験課題が 10 テーマ以上用意されている。2007 年度までは最初の 3 週間は座学により、誤差論の講義や、基本的測定器の実習およびグラフの書き方の説明などにあて、残り 12 週で 10 テーマの実験課題を実施してきた。2008 年度はレポートの書き方の指導を徹底するために、最初の 3 週間が終了して実験が始まってからの 3 テーマはレポート指導日をその実験テーマの次週に配置した。また、2009 年度はさらにレポート負担の軽減及びレポート指導を徹底するために、最初の 4 回を座学に、さらに全ての実験テーマにレポート指導日を配置することにして進めている。これにより、レポートの不提出による単位の不認定が大幅に減少した。

2. 教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

A. 数学関係科目

現在、入学してくる学生の基礎学力の不足と多様化が問題になっている。最近の指導要領の改訂により益々この傾向が強くなっている。このことは本学に限らず全国的な現象として知られているところである。当センターにおいては、2000年度からこの問題への対応に取り組んできた。数学においては、微積関係科目と線形代数の科目を1年次の重要科目ととらえ、特に多くの学生が苦手とする解析関係科目についてコース制を導入した。従来からある微積分の科目に加え、新たに基礎解析・演習を1年次の前期に置き、後期から微積分の科目を修得するコースを設けた。これにより、高校生の段階で、特に指数・対数関数や三角関数の理解や運用が不十分な学生に対応できることになった。

4月はじめに行うプレイスメントテストによって、いくつかの学科をグループとしてクラス分けを行い、上記の基礎解析・演習からスタートするクラスと従来からの微積分1・演習からスタートするクラスが平行して走ることになった。(資料:2009年度クラス分け(数学))

複数学科を3~4つのクラスに分けて、学生の習熟度に応じて基礎解析・演習クラスと微積分1・演習クラスが平行に置かれている。各クラスの教授陣は連絡を密にして、授業の進度、講義や演習の工夫などの情報交換を行っている。さらに、クラスによる不公平感が生じないために合格率に大きな差がないよう努めている。2009年度における、1年次前期科目の基礎解析・演習や微積分1・演習の合格率はおおよそ80%~85%、線形代数1の合格者は85%~90%になっている。1年次後期科目についても合格率は(若干低くなるが)ほぼ同様な数値になっている。

さらに1年次の後期には基礎解析・演習および線形代数1の再履修クラスを設けて初年次生に手厚く対応している。この再履修クラスにおいてはテーマを絞り、演習をより多く取り入れて学生の達成感を重視している。また、少人数クラスの特典を活かして出来る限り個別対応に努めている。

数学関係科目の教授陣は20数名であるが、このうち非常勤講師が約15名である。日常的には電子メールで情報交換を行い、特に習得の難しい学生への対応などについて意見交換している。また、学期末には全員が集まり当該年度の授業の問題点やシラバス、翌年度の授業について議論し、さらに評価の統一性も図っている。

B．物理・力学関係科目

(1) 習熟度別クラスによる「力学1・演習」「物理学1・演習」

機械系学科(HJ)の「力学1・演習」(標準クラス)では、高校時代に物理学をある程度学んできている学生が多いため、従来のスタイルで講義を行うことが可能であった。しかし、「円運動」や「単振動」の理解は、標準クラスの学生においても困難で、ほとんどのクラスでは「単振動」は後期の「基礎物理学」に委ねている。さらに、「力学1・演習」(初歩クラス)では、物理を学ぶ以前に、数学的な取り扱いができない学生が急増していることが目立っている。文字式の扱い、1次方程式、連立方程式、関数とグラフ(1次関数、2次関数)など、質点の運動を理解するために必要な数学的な知識を復習しながら進めていかねばならない状況である。

電気・物質学科(EGF)の「物理学1・演習」,「物理学2」(振動・波動)はこれまでの「力学1・演習」「力学2」「基礎物理学」によるコースから、力学と同じレベルで振動・波動にも演習を行い、この習熟度を高められるように新設されたものである。力学・物理学関連の全時間数を減らして学生の負担を軽減するとともに、専門分野で必要になる基礎的な内容に重点を置いて教授することが狙いである。しかし、振動・波動の理解は容易ではなく、効果的な教授法の模索が続けられている。

このように習熟度別によるクラス編成では、クラス内の学力レベルの格差が抑えられているので、少なくとも学生の状況に合わせた授業運営が可能であり、授業に対する学生の満足度を高めるとともに、講義を進めやすい環境を教員側に提供して精神的な負担を軽減させている。定期試験を受験した80%近くの学生が単位を取得できている。「高校1年の数学」がある程度マスターできていれば、2コマ連続の授業でゆっくりと演習を進める現在の授業で、力学の基礎を習得することは可能なようである。しかし、学生の学力レベルを授業に対する理解度の現状から判断すると、進級するごとに学力レベルの格差が拡大していくことは避けられないと思われる。幅広く柔軟な教育システムのもと、多様な教育観を持って運営していくことが必要であろう。

(2) 物理学・実験

「物理学・実験」については、2006年度から、工学部各学科の定員が10~20名減少した関係で、定員の大きい学科も2クラスに分けず1クラスで指導する体制に変更した。指導する教員の数も学科の定員に合わせて減らし、5名ないし3名体制にした。この年は、実験は終了したがレポートを出さない学生が急増した年でもあった。このため、レポートをより書きやすくする必要に迫られ、実施する実験テーマを変更し、実験指導書の全面書き換えを行った。2006年度は最初の1テーマだけ実験日の翌週をレポート指導日に当て、さらに、最後の実験日を実験予備日としてレポート未提出者の救済に当てた。レポート指導日の有効性が認められることから、2007年度はレポート指導日を最初の3回の実験テーマについて実施することにした。(1)レポートに対する負担の軽減とレポート指導の徹底、(2)これまで、他の講義時間中に実験レポートを書く学生が多くて授業に差し障りがあるという批判があったが、これらに答えるものであること

が期待された。さらにもう一步進めて、2009 年度は、全テーマについて指導日をもうけることにした。各人が履修するテーマ数に関しては、2007 年度は 8 テーマ、2009 年度は 5～6 テーマになったが、レポート指導の充実、測定器の実習、グラフの書き方など特別な時間を設け十分時間をかけて指導することができるようになった。

(3) 再履修クラス

教員及び受講する学生の努力にもかかわらず、合格ラインに達しない学生が出ることはやむをえない。高校時代に物理学をほとんど学んだことのない学生にとって、繰り返し時間をかけて勉強することは必要であろう。すなわち、1 年次前期に開講されており、基幹科目でもある「力学 1・演習」「物理学 1・演習」においては、1 年次後期に「(再)力学 1・演習」「(再)物理学 1・演習」を配置し、セメスター制の完全実施によって、前期に単位が取得できなかった学生でも後期の再履修クラスに履修登録をして再度学習できるようにした。2009 年度も同様な意図で再履修クラスは開講されている。再履修クラスを充実させることで、学生が何度でも再履修することができる環境を整え、合格ラインを下げることなく教育できることを目指している。

(4) 力学・物理学合同運営会議

2006 年度からのカリキュラム導入を機に、力学運営会議及び物理学運営会議を合同で開催するようになった。現在の構成メンバーは AS(5)、H(1)、J(2)、Z(1)の 9 名である。年 3 回(2 月、5 月、9 月)の定例会議では、講義内容、クラス編成、合格ライン、成績評価、予算申請、TA 採用など、企画・立案・決定がおこなわれ、実質的な運営が行われている。例えば、どのコースも共通のシラバスのもとで、同一の教科書を使い、それぞれの担当クラスの習熟度に合わせて授業運営と成績評価を行い、評価基準は出席と小テストを含む演習で 40%、定期試験で 60%としている。各クラスには TA(ティーチング・アシスタント)を配属し、演習指導が行き届くようにした。その結果、「力学 1・演習」「物理学 1・演習」においては、試験のやり方も工夫することより、受験した学生の 80%以上が合格率している。なお、これらの成果は、運営会議メンバーの各教員による基礎専門科目に対する高い認識と、学生に適した授業を実現するための創意工夫によって支えられているものであり、運営会議を構成・運営している意義はきわめて大きい。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

A. 数学関係科目

以前に行っていたオフィスアワーは、実効性が見いだせなかったもので、今のところ行っていない。数学教員の多くは寝屋川学舎R号館1階に研究室をもっているため、質問等はそこに行くよう学生に周知している。また、教員は時間の許す限り学生の質問に応じるよう、お互いに申し合わせている。実際に、ほぼ毎日どこかの研究室で学生が質問している光景が見られている。

別に、毎週月曜と火曜に開かれているコラボカフェをアナウンスして、教員に質問しにくいときは、これを利用するよう促している。

4. 卒業研究指導について

工学部・情報通信工学部の各学科より、学生の希望に応じて卒業研究指導を行っている。受け入れに

については各教員に任されているが、卒研内容のアナウンスや卒研発表等の行事は当センターがとりまとめて行っている。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

学部・学科共通の基礎専門科目を担当する側からいくつかの問題点を指摘しておきたい。1つは、工学系の学生が身に付けておくべきミニマムスタンダードを統一的に教授するためにさまざまな工夫を行っているが、この数年は各学科の独自性が優先されつつあり、たとえば線形代数1を配置しながらそれにつづく線形代数2は配置されないなど当センターの意図が十分に活かされないカリキュラムが見受けられる。学部・学科の共通基礎専門科目に対する全学的な位置づけ、制度化が望まれる。

第2の問題は、で開講しているいくつかの科目についてである。上記のような我々の意図とは別に、提供している科目を学科個々の思惑で切り売りの的に配置されている側面が見受けられる。たとえば、基礎解析・演習の再履修クラスが設けられていないことや、学科にとってふさわしくない(大半の学生にとって習得困難な)数学科目を配置している場面などが見受けられる。の学部・学科と工学系共通の基礎専門科目を提供する組織との調整機関の設置が望まれる。

6．添付資料

1. 資料1 2009年度クラス分け(数学)

工学部 電気電子工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

「電子工学科」から「電気電子工学科」へ名称変更したことに伴い、世の中で重要なキーワードとなっている環境・エネルギーの分野を考慮して、省エネに貢献する電気系技術の講義や実験・演習を新設・改訂した。この効果は大きく、新入生のこれらの科目に対する期待は我々教員の想像をはるかに凌ぐものがある。これを一層推し進めるため、企業から講師を招いて企業連携講座を今年度は1講座新設し、次年度は2講座、次々年度は4講座、順次新設する予定である。この連携講座については、特に入学生募集にも大きな効果を挙げている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

近年開講科目の見直し・整理が進む中で、講義の内容や難易度が科目により大きく異なる傾向がさらに強まっている。従って、出席を取る、毎回宿題を課して自宅学習を促す、模範解答を配らずに考え方・やり方の解説を徹底する、など科目ごとに教員が多彩な工夫を凝らしている。他方学生から見ると、宿題の有無などそれぞれの講義への対応が講義ごとに異なり、成績評価方法も異なっているため、まごつくことが多いようである。シラバスに成績評価方法を文章で記載するだけでなく、初回のガイダンスでその講義を受講するために必要な心構えや、教員が受講生に求める事項を改めて口頭で伝えることに十分な時間を割くことが望ましいであろう。

授業アンケート結果を講義へ反映させる手法について：前項に記したように、理解の難易度が講義により大きく異なるため、受講生からの要望も講義ごとに大きく異なる。例えば「宿題を減らしてほしい」という要望を、単純に学科内の総ての科目に当て嵌めることは妥当ではない。従って、アンケート結果は各講義ごとに担当教員が個別対応しており、学科全体で共通の対処は今のところ行っていない。また正式なアンケート形式では、素直な感想や意見をストレートに述べられない受講生が多く、むしろ全員が集まる学科入門科目などの終了時に、複数の学生が（別の科目に関する）意見を口頭で訴えてくる事が多い。学生の本音をどのように吸い上げるか、その手法については一層の工夫が必要であろう。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

学科基幹科目である基礎電磁気学・演習や電気数学への出席状況・小テストの成績は定期的に全教員に情報公開・共有し、欠席学生・成績不良学生について、電気電子工学ゼミナールの時間を活用して早期に指導している。学科行事などの案内やキャリア支援講座などへの勧誘も全員が集まる工学基礎実験の際に口頭で話をするように努めており、積極的な大学生

活を送るよう指導することは成功していると考えている。

4. 卒業研究指導について

卒業研究については担当教員それぞれによって取り組み方は異なっているが、昨年度と比べて変更点は特にはない。就職状況の悪化に対応すべく、就職指導は3年後期のプレゼミから継続して力を入れている。以下に各先生方から戴いた意見を記述する。

卒研生の一部が不登校になる場合が多くなっている。実家から登校する学生には親との電話を通じて何とか呼び出している。ある卒研生については、おそらく、30回以上母親と電話連絡し、他教員の協力もあり、何とか卒研発表にこぎ着けた。ただし、下宿生で、本人が携帯電話に出ず、両親もあまり連絡がつかない場合、対応の方法がほとんどない。(河村先生)

前期は週2回のゼミ、後期も週2回のゼミを行っているが、特に前期は就職活動や6月から始まる教育実習などで、全員揃ってのゼミを行うことが難しいのが現状である。このため研究室全体のチームワーク作りは夏休みに実施してきたゼミ旅行で2～3泊の合宿で何となくまとまり、協力関係ができています。また、友電会主催のソフトボール大会に向けての練習などを通じてより一層のチームワークができ、後期からの卒業研究の進捗に好結果をもたらしている。このようなチームワーク作りをしてきた結果、これまで卒業研究で不合格者は0である。(藤崎先生)

実験研究を基本にして一人一人の個性を活かすことを念頭に置いている。課題決定には本人と直接面談して本人の授業や生活習慣を話し合いながら決定する。週1回半日のゼミ発表会を行っており、全員が質問やコメントなどを行うように指導して全体との や助け合いの精神を養い、自らの成長を自覚させている。実験は原則として毎日従事して報告させている。不十分や不満 なデータは破棄させており研究への真摯な態度を養うように指導している。それぞれが助け合って実験研究をするようになってくる。(瀧川先生)

週1回の卒研ゼミを設けているが、就職に苦戦する学生が多く立ち上がりが遅い。そのため、他大学(大阪工業大学)との合同中間発表会を実施した。学生は緊張感を持って準備に取り組み、非常にうまく発表することができた。また、研究のビジョンを明確にすることができ、就職活動がうまくいかず、一時研究室に出て来ない学生もいたが、学生部と連携し、家庭への文書による連絡、電話連絡、他の卒研生からの励ましなどを実施したところ、復帰した。最終的には、配属卒研生全員が卒業研究に合格した。(伊与田)

就職活動や大学院受験の際に、自分の持っている技術力を的確に表現し、内容の豊かな自己アピールを行えるよう、3年後期のプレゼミの一環として実験のトレーニングを行っている。具体的には、計測装置・電子回路の試作や簡単なテーマについての探求実験などを数週間かけて行い、3月末には発表会を行った。この発表資料を作成することで、卒研生は自分

がどういう事が達成出来たのか明確に意識化し、的確な言葉で表現できるようになった。この達成感は4月以降の卒業研究へのスムーズな移行も可能にする。(富岡)

5. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

学科名称変更に伴うカリキュラム改訂は、学生には高い評価を受けている。まだ1年生科目だけであり、教育効果の点検は今後の趨勢を見なければ結論は出せない。だが、「エネルギー」「環境」を考慮した電気系科目の追加は、学生が自己目標を設定し、社会で如何に活躍するかを考える上で貴重な基盤をなすものと期待できよう。

産学連携講座として産業界の第一線の技術者による、現場の生きた技術内容を講義してもらうことも、工学に対する興味付けと学生の自己目標設定に大きな寄与を果たすであろう。

6. 添付資料

特になし

工学部 応用化学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

2009年度新入生から、高校生(受験生)に対する応用化学科への魅力を増強させるため化学系科目を充実させた新しいカリキュラムがスタートした。新カリキュラムでは、マテリアル(新科目:ナノ化学、超分子化学、錯体化学)、暮らしと化学(新科目:食品化学、化学と生活、化学と安全、化学と産業、化学と倫理)、バイオ(新科目:生体機能化学、バイオ材料)などの分野で新しい科目を設けている。今年度は1年次の「化学基礎実験」、「生活化学実験」についても実験テーマも新カリキュラムに対応して一新させたが、2年次の実験科目(来年度実施予定)のテーマについても教員一同で検討し、内容を一新すべく準備を行った。

来年度開講予定のキャリア科目導入や、他学科の科目を一部受講できるように特別ゼミナールの履修の仕方の変更などについて検討し、工学部全体のカリキュラム改革に協力した。

シラバスについて、新しい科目を中心に学科教員全員で検討を行い、これまでであった科目についても全員でシラバスの確認を行った。

2．教育改善や授業点検，成績評価(平均値，成績分布，合格率など)について

平成20年度に引き続き平成21年4月に淡路島で合宿研修を行い新入生同士、教員や院生等との交流を図った。平成20年度は初日の天候不順のためカッター研修が出来なかったが、2009年度は天候に恵まれ爽やかな風の中でカッター研修を行った。また、2日目は教員が作成した元素カードによる研修も行った。

2009年度も平成20年度と同様に任天堂DSを学生に配布し基礎ゼミナール1・2で活用した。具体的には「漢検DS2」や「常識カトレニング」というソフトを使い、基礎ゼミナールの一部で利用し漢字力や常識力の強化に努めるとともに、数人で対戦するなどして新入生相互の交流を図った。

Moodleを利用したe-ラーニングを一部の科目に導入し、講義内容の到達度確認、学生自身の成長の確認に役立てた。定期試験(期末試験)に加え、Moodleを利用した中間試験や再評価試験を行う科目が増えた。中間試験や再評価試験を行った科目では平均点、科目合格率が大幅に向上した。

大学で実施されるFD研修会にG学科教員は積極的に参加した。また、用事・出張等で止むを得ず欠席した教員は後日FD研修会のDVDを教育研究センターから借出して研修に努めた。

3．学生指導(履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など)について

年度初めの履修登録の前に、各学年で集合させG学科のガイダンスを行った。そこでは、特別な科目(プレインターンシップ、インターンシップ、特別ゼミナール、プレゼミナールなど)について注意事項を説明した。

1年生に問題行動を起こす学生が1~2名おり、まず合宿研修で問題になった。教員全員で対応にあたり、解決を計った。また、帰学後は学生課とともに学外の組織への対応を行い円満に解決した。その後、その問題学生は他学科と合同の授業で他学科の学生とトラブルを起こした。学生課が中心となって解決を計った。さらに、後期始めの時期にその問題学生が1年のある学生にイジメを行っているという学生から

の報告があった。同時期、別の学生(問題学生と仲が良い、1年)が教員に手を出すということがあった。主任が学生課と協力して事実の確認および解決を計る一方、学科教員全員でその対応について話し合った。その結果、軽微であっても学生の問題行動に出会ったら指導する、学内、学外で応用化学科学生に出会ったら呼びかけを行う、学生の問題行動を学科会議に報告し議事録に残す、ということを学科教員全員で申し合わせた。このような、学生課と学科教員全員による地道な努力を続けた結果、後期終盤では学生からの苦情が減少し、イジメも沈静化し、授業での学生の雰囲気も落ち着いたものになった。

昨年度の反省から、良くできる学生に対するケアも含め様々な学生に対応する目的で2009年度はオフィスアワーを設けた。しかし、オフィスアワーに訪問した学生は殆どいなかった。オフィスアワーについては、まだ1年間しか実施していないので2010年度も実施し様子を見ることとした。

2009年度の就職指導についてであるが、世間の景気悪化のため就職率が例年より悪いという状況が続いた。就職課による指導に協力し就職率の上昇に努めた結果、応用化学科では他学部・学科に比べ相対的に良い就職率となった。しかし、昨年度と比べると低い就職率なので、今後、就職率が上がるよう、キャリアに関する指導を積極的に行うことを学科教員で申し合わせた。

4．卒業研究指導について

各研究室で、輪読会・検討会など、週2回のゼミナールを実施した。卒業研究の進捗状況を把握するため、夏休み前後にはいくつかの研究室が集まって中間発表会を行い、学科会議でその様子を報告した。中間発表会には担当教員だけでなく他の教員も加わることによって学生の意識や意欲を高めることができている。2010年2月15日・16日には学科全体で卒業研究発表会を行った。そこでの議論やコメントを卒業論文に反映させる様に指導している。

2009年度から始まった卒業生アンケートでは、卒業研究に対して「就職活動に役立つ」などといったコメントと共に高い評価を得ることができた。

5．その他、特記事項(学科独自の教育など)など

資格支援講座として、通常の講義とは別にボランティアで国家試験である公害防止管理者(水質関係)試験の資格支援講座を開設した(教育研究D 予算を利用:平成20年度・21年度は榎本、湯口、川口が担当)。応用化学科の2、3年生を中心に34名が受講し、10月の国家試験までに26回の講義を実施した。2009年度公害防止管理者「水質」関係で20名が国家試験を受験し、その内5名が科目合格し、平成20年度から受験していた1名が5科目全て合格し、本講座受講生の中で初めて公害防止管理者水質1種の合格者となった。来年度も実施するので、継続して受講する学生の中から、さらに多くの国家試験合格者が出ることを期待している。

その他、応用化学科では、高大連携、テクノフェア、オープンキャンパスなどに積極的に協力した。また、2009年度はサイエンスパートナーシップも実施し、大変好評であった。高校訪問も行い、広報活動にも取り組んでいる。

7．添付資料

特になし。

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

電子機械工学科では，メカトロニクスの主要素である「機械」「電気・電子」「計測・制御」「情報・コンピュータ」の4分野をバランスよく学び，ハードウェアとソフトウェアの両面から広い工学的視野を持った技術者を育成する．シラバスに関しては授業内容 15 回分を具体的に記述し，評価方法も明記している．

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

各教員に担当授業を割り振る際に，できるだけ負担が均等になるように行なっている．授業点検に関しては学生に対する授業アンケートを行い，授業改善に努めている．成績評価に関しては，期末のテストのみではなく，複数回の中間テストや出席など総合的に評価を行なっている．

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

1 年生から 3 年生は，各学年 10 名程度の学生を各教員の担任とし，年 2 回の成績 時に履修指導や教育相談を行なっている．また，1 年時における「基礎ゼミナール 1，2」においてはグループ担任が各学生を担当し，学生との意思の疎通をはかっている．就職指導に関しては，4 年および 3 年後期からは各卒研室にわかれ卒研およびプレゼミナールに出席することにより，卒研担当の教員が個別に行なっている．

4．卒業研究指導について

3 年生は後期から各卒研室に配属となり，早くから卒業研究に接することにより教育・研究に対する動機付けを行なっている．また，卒研生は 1 年間の成果を 予稿， 卒研発表， 卒業論文として発表およびまとめを行なっている．

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

演習・実験科目において，図面やレポートのチェックを厳しく行ない，再提出させることにより理解が深まるように努めている．

6．添付資料

特になし

工学部 機械工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

講義に対応した演習を重視している。基礎力の充実を図る目的で演習科目を多く設けている。それらの科目では学生自ら課題に取り組み確実に理解させることを目指している。また、小テストや演習の評価を行っている。シラバスでは目標を明確にしている。

講義	演習	講義	演習
工業力学および演習1 2クラスに分け少人数教育としている		工業力学および演習2	
材料力学1	材料力学1演習	材料力学2	材料力学2演習
熱工学1	熱工学演習	流体力学1	流体力学演習
機械力学1	機械力学演習	機械運動学1	機械運動学演習
制御工学1	制御工学演習	機械要素設計1, 2	機械要素設計演習
CAD 製図	CAD 実習	機械設計製図演習	

2. 教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

各教員が学生に理解しやすい授業を心掛けている。小試験やレポートを課す科目も多い。出席しはじめに取り組む学生が不合格になることはあまりない。科目によっては、再評価を行っている。学生にやり直しの機会を与え、内容の理解を深めている。

3. 学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

各学年ともグループ担任との面接を通して行っている。5月には新入生歓迎会を行い、新入生とグループ担任の懇談の機会を作った。1年生は基礎ゼミの中に教員との面談の機会を設けた。

3月の3学年のオリエンテーションで、インターンシップ、就職指導、履修指導、生活指導を行った。

4. 卒業研究指導について

学生の希望を最大限配慮し、研究室への配属を行っている。その様な学生に対して、各教員が熱心に研究指導を行った。

5. その他，特記事項（学科独自の教育など）など

- 1) 機械設計技術を認定する機械設計技術者 3 級資格試験の支援(3年生以上)。
- 2) CAD 利用技術者試験の合格支援。充実した 3 次元 CAD 教育環境。社会で最も利用されている 3 次元 CAD システム(CATIA) を近隣の大学では最大規模の 60 台導入している。

工学部 環境技術学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

機械工学・電気工学の知識を基礎にし、環境問題に取り組み解決できる能力を有する技術者養成を目標にしている。環境・機械・電気の分野の知識を習得し、幅広い工学知識をもち、問題解決能力をもつことができるよう配慮している。

2．教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

授業アンケートの結果を参考にし、授業点検を行い授業改善に努めている。成績評価は、期末試験以外に、授業時に随時行う演習問題の評価や出席状況を考慮している。

3．学生指導（履修指導や教育相談、学生相談、生活相談、就職指導など）について

全職員参加のもとに、グループ担任制を採用している。定期的には成績配布時に、履修指導や教育相談を行い、また、日常のあらゆる学生相談に対しては、担当のグループ担任が常に相談に当たっている。必要に応じて学生相談室アドバイザーに相談し、学科会議にフィードバックし対応している。

4．卒業研究指導について

今年度は、学科創設以来、初めて卒業研究が実施された年である。3年生後期に担当されている「プレゼミナール」で少人数にグループ分けし、卒研担当教員が研究内容および卒研テーマを説明し、卒業研究を行うための必要な基礎教育を行った。その成果が実ったのか、初めての卒業研究としてはスムーズに卒業研究が行えたと思える。

5．その他、特記事項（学科独自の教育など）など

演習・実験科目に対しては、レポートを厳しくチェックし、内容を良く理解し書くように指示している。

また、環境に関連する各種資格（環境社会検定試験〔エコ検定〕 気象予報士、CAD利用技術者試験、エネルギー管理士など）を修得できるよう支援し、ゼミナールなどを実施している。

6．添付資料

特になし

工学部 基礎理工学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

各学年で実験・ゼミを充実させ、きめ細かい指導ができるようにしている。特に、2年生向けの「基礎理工学ゼミナール1・2」では、基礎的な数学と物理学について学生各自の習熟度と興味にあわせてクラスを編成し、基礎学力の強化と個性を伸ばす教育を試みている。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

- ・1年生向けの「基礎理工学入門」に関して、できるだけ担当以外の教員も出席するようにしている。また、2, 3年生のボランティアが手伝うこともある。
- ・1年生向けの「基礎ゼミナール1・2」は、プレースメントテストや入試成績などによる習熟度に基づいてクラス編成を行い、グループ担任・副担任が担当している。学生の大学生活への適応と学力の向上を目標に、担当者グループ会議を開いて学生の状況を的確に把握しつつ進めている。
- ・2年生向けの「基礎理工学ゼミナール1・2」では、これまでの成績や履修状況に基づいてクラス編成を行い、成績の評価など担当者間で相談を行いながら運営している。
- ・「物理学と先端技術」等のリレー講義や「応用サイエンス実験」等の専門的実験科目においては、担当者会議を適宜開いて状況を把握しながら進めている。
- ・3年次の専門科目におけるコース(数理モデリングコース，科学計測コース)において、関連する科目間で連携して進めている。(数学:「数理モデリング」,「数理モデリングゼミナール」,「シミュレーション基礎」など。科学計測:「計測・データ処理1・2」,「シミュレーション工学」,「応用サイエンス実験」,「科学計測ゼミナール」など。)

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

- ・学科会議のたびに、欠席など気になる学生についての情報交換を行っている。必要なら担任・副担任などが学生に連絡を取るなど迅速な対応をしている。
- ・3月に新年度に向けた学年別の学科ガイダンスを行い、カリキュラムの基本的な考え方を改めて説明するとともに、履修モデルや履修上の注意を知らせている。また、基礎理工学科の1週間が分かるように(教職科目との関連も分かるように)、学科の時間割を作成して、学生に配布している。
- ・留年生や単位不足と思われる学生に対して、履修登録や就学上のアドバイスを適宜行っている。

4．卒業研究指導について

学科としての卒業研究の実施は来年度からであるが、3年次生が「プレゼミナール」を受講し研究室の配属を決めた。今後さらに「プレゼミナール」を受講する研究室の決定方法や卒業研究との関係については検討すべきである。また、就職活動に向けての取り組みを強化することが大きな課題として残されている。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

- ・新入生に対して、宿泊研修やエッグドロップコンテストなど、単なる歓迎会ではない歓迎行事を行っている。これらには、2・3年生の有志も参加するなど、運営や準備に関わることが定着しつつある。
- ・さまざまな企画を通じて、学年間にまたがって学生が交流できるように努めている。
- ・オープンキャンパスや体験授業等におけるアシスタントとして学生有志が参加し、科学の楽しさを伝える技術と経験を深めている。
- ・ニンテンドーDS等を活用し、自学自習による教育効果をあげる取り組みを進めている。

6 . 添付資料

1. 資料1 科目履修指導用資料(学科ガイダンス, 3年生用)
2. 資料2 基礎理工学科時間割表(学生配布用)
3. 資料3 基礎理工学科の履修モデル(2010年度, 学生配布用)

情報通信工学部 情報工学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

情報工学科の教育目標は以下の通りである：

「情報」は、「物質」や「エネルギー」と同じく、現代社会の中で大変重要な役割を果たしている。「情報」を扱うためには、多くのツールの応用が必要である。これらのツールや手法を提供し、あるいは、それらに関する知識を次の世代に伝える学問分野が「情報工学」分野である。情報工学科の教育目標は「情報工学」分野の基礎知識および専門知識を、情報工学科の学生達に教えることである。そのために、情報工学科のカリキュラムは 1、2 年時に基盤的専門知識を対象にする科目を提供し、3、4 年次に専門知識を対象にする科目を幅広く提供している。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

2009 年度、情報工学科の教育方針やカリキュラムの適切についての議論を学科会議で行った。そこで、教育方針やカリキュラムはおおむね適切であるという意見が多かったが、弱点も指摘された。主に、ネットワーク技術を現在より深く紹介する必要があるという意見や、JAVA コンピュータ言語の紹介および演習の必要性が指摘された。

カリキュラム改訂に向けて、カリキュラムの現在の様々な問題点についての話し合いを経て、今後の情報工学科のカリキュラム方針を決定した。

情報工学科が実施していた試験における成績評価はかなりバランスがとれており、大きな問題は存在していないと判断している。学生からも、不公平な判断が起こったなどという不満の声はなかった。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

履修指導や教育相談は、学科の教員全員が行っており、現在まで問題は起こっていない。就職指導は主に卒業研究生を対象に、学科の二人の就職担当者の教員の支援を受けながら、それぞれの研究室別で行った。これに加えて、1 月 15 日（金）に株OVO(オーヴォ)社に委託して、学部3年生および大学院M1生を対象した就職指導を行った。この指導の内容は、「就職活動で内定を得る心構えと対策」であり、165 名の学生が出席した。

4．卒業研究指導について

卒業研究指導を例年どおりに行った。大きな問題はなかったが、今年の就職活動がかなり困難であっ

たため、多くの学生が卒業研究に集中することが難しかったようであった。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

特になし。

6．添付資料

特になし

情報通信工学部 通信工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

(1) 教育目標に関する学科3方針（下記）を策定した。

- ・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー(DP))
- ・教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー(CP))
- ・入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー(AP))

(2) 平成23年度から始まる新カリキュラム策定に関する学科の基本方針（案）をまとめた。

2. 教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

(1) 各科目・教員ごとに、個別に以下の教育改善を実施した。

- ・毎回授業の始めに、前回の内容およびこれまでの授業の流れを簡単に説明した。
- ・3分割学習…90分間講義し続けると学生の集中力が持たないため、なるべく、授業を約30分ずつ【復習】【講義】【演習】に分けて行うようにした。
- ・復習の導入と遅刻対策…遅刻や欠席する学生が年々増加してきているので、授業開始時刻から即講義を始めることができない。このため、出席者数が一定に達するまでの時間を前回の復習に宛てるようにして、反復学習するようにし、理解度の向上に努めた。
- ・数値例を用いた説明…数式による説明だけでは理解できない学生が多いので、パソコンやプリントを利用して、必ず、数値例を用いて具体例による説明を行うようにした。
- ・演習による理解度の向上と把握…ほぼ毎回、演習や小テストを行い、理解度の向上を狙い、また、学生の理解度を把握するように努めた。
- ・コンピュータ演習中の質問受付方法の改善…演習中、プログラムのエラーを見てほしいという質問が多く、各学生が質問した順番の把握が困難だったので、【質問受付 web アプリケーション】を作成し、申込順に回答できるようにした。
- ・ムードルを用いた e ラーニングによる自宅学習を行った。
- ・自作教材による授業…市販教科書はレベルが高く、消化不良になることが多いため、自作テキストやプリントを使用した。
- ・実際に分解した装置を回覧し、装置の構造の理解に役立てた。
- ・教科書にはまだ載っていない最新技術の紹介をするよう努めた。
- ・授業の参考になる企業の技術解説ホームページを紹介した。
- ・パソコン・ネットワーク・アプリの使用…パソコンを用いてスクリーンに画面を投影し、スライド、WEB、アプリケーションソフトなどを用いて、できるだけ興味深く、直感的に理解できるように工夫した。
- ・アニメーションによるビジュアルな説明…漫画・アニメ世代のせいか、活字が苦手な学生が多いので、PowerPoint や Keynote によるアニメーションを用いたビジュアルな説明を心がけた。
- ・眠気防止対策…パソコンを用いた授業をしているだけでは、一方通行となりがちで、寝てしまう学生も多いので、プリントや黒板などの複数のメディアを使用して、手を動かさせるようにして、眠気防止につとめた。

(2) 授業評価、成績評価など

- ・PC、DS、携帯電話を使用する「授業アンケート」を実施し、「授業改善プラン」を作成した。
- ・積極的に発言する者に加点…授業中に手を挙げて発言することや、良い質問を行った学生に加点するようにし、積極性を育てるようにした。
- ・「教授要目の評価欄」に出席、小テスト、中間テスト、期末テストの評価点割合を明記した。

3. 学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

(1) 平成 17 年度より「グループ担任制」による学生指導を継続実施している。

各学年を学科専任教員が担当する 9 グループに分け、各グループの担当教員より、履修科目の指導、成績交付時の指導、生活全般の指導等、大学生生活全般にかかわる指導を行っている。

(2) 「G P 学生支援推進プログラム」(適性検査およびフォローアップガイダンス等) の実施。

キャリア教育および人間形成のための教育支援の一環として、平成 21 度は 2、3 年次生を対象として以下のプログラムを実施した。

2 年次生:「自己プロGRESSレポート」(適性検査):10 月 15 日(木)4 限

「徹底活用ガイダンス」(フォローアップガイダンス):11 月 19 日(木)4 限

3 年次生:「就職適性検査」(適性検査):10 月 13 日(火)2 限

「徹底活用ガイダンス」(フォローアップガイダンス):11 月 17 日(火)2 限

最近の就職難をふまえ、できるだけ早い段階から就職に対する職業意識を向上させるため、2010 年度より、全学共通科目として 1、2 年次にも「キャリア形成支援講座」が導入され、キャリア支援科目が更に充実する見込み。

4. 卒業研究指導について

(1) 平成 20 年度より「プレゼミナール」において、3 年次生に対して卒業研究室別の事前卒業研究指導を継続実施している。

(2) 学生自身によるテーマ設定の実施(自主性尊重のため)。1 研究室で実施中。

(3) 教員の価値観を明確に示す。学生に対して曖昧な態度をとらない。

5. その他，特記事項（学科独自の教育など）など

(1) 平成 18 年度からの新カリキュラム以降、キャリア支援科目を 1～3 年次に設定し、継続実施中。

・情報通信工学入門(1 年次)…将来の活躍分野を含めて、情報通信工学全体の入門。

・特別ゼミナール 1・2(2 年次)…無線従事者関連資格取得のための支援講座。国家試験問題などを用いた授業を行うが、定期試験はなし。資格を取得した場合、程度に応じて単位を認定。

・プレインターンシップゼミナール(3 年次)…必修科目としているのは F 学科のみ。就職、インターンシップのためのマナー教育、準備教育。「プレゼミナール」を受講する研究室配属も行った。

6. 添付資料 なし

情報通信工学部 光・エレクトロニクス学科

光・エレクトロニクス学科は平成19年度の学生募集停止により、他学科とは異なった状況にある。これに伴い、学科教育も異なってくるので、始めにそれについて述べる。

2009年度においては、正規の学生が3、4年次に在籍、1、2年次には留年生(休学生含む)のみが在籍している状況であった。2010年度には正規生は4年次のみとなる。したがって、留年生のみが在籍している1、2年次のカリキュラム(在籍者数が少ない)における開講形態をどのようにし、最終的に如何にして最後の1学生を卒業させるかが重要な課題となる。一方、所属教員についても移籍先学科での講義負担が増加しており、本学科の専門科目を学科独自ではすべて開講できない状況にある。

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

本学科ではエレクトロニクスをベースとして、その応用として光エレクトロニクスに主眼を置いた教育を行っている。カリキュラムもそれに合致し、基礎力と応用力を兼ね備えた技術者を世に送り出せるように工夫を凝らしてきた。

関連分野の技術的進展に伴うカリキュラム内容の改善などを、カリキュラム改定として実施する事は、本学科では現在不可能な状況であるので、残された講義期間は短いものの、各教員の講義内容の範囲内での内容改善(シラバスの再検討)を行っている。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

既に述べたように、本学科では抜本的な教育改善を行う時間的余裕が無い。各教員の講義の範囲内での内容改善を行っているが、残念ながら留年などで残されている学生のレベルに合わせ、より平易な教え方をしたり、成績評価基準を若干引き下げたりしている。このように在籍するすべての学生を(特に留年生を)無事卒業させることに主眼が移っているのが現状である。

授業の開講形態については、正規生の受講が終了した再履修科目に関し、1年次配当のすべての科目および2年次配当の科目のいくつかを、教員の移籍先での負担増を考慮して他学科との合併講義としてきた。受講生にとっては、合併となることにより講義内容が従前の内容とは変わるため、やや負担を強いことになる。この為、できる限り本学科所属の教員が担当する移籍学科での科目を合併講義の対象とする、などの工夫を行っている。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

本学科においては、卒業研究生以外の正規生に対する学生指導は、原則としてグループ担任が中心となって履修指導を確実にを行い、卒業できるように適宜助言を行い、相談にのることができる体制をとっている。特に留年生については、上記のように履修する科目の一部が他学科との合併授業となってくることもあり、適切な指導が重要である。3年次在籍の留年生は後期、プレゼミナール担当教員の直接の指導を受けるので、履修指導は主としてプレゼミナール担当教員が行っている。

4．卒業研究指導について

卒業研究生には、配属研究室でゼミナールを実施し、研究室ごとに2回の卒業研究中間報告を課している。2月中旬に学科全体での卒業研究発表会(全卒研対象)を行い、各自の卒業論文とあわせて卒研可否判定を行う。

卒業研究発表会においては、それに先立つ卒業論文の提出を義務付けている。発表会においては、全教員が回覧された卒業論文に目を通した上で、発表者が卒業論文の内容を、指示された時間内に、的確にプレゼンテーションできているかどうかを合否の判定基準としている。

このような指導により卒研担当指導教員だけでなく、専門分野が異なる他の教員からも卒業論文に関する有益なコメントを得ることができる。さらに、発表に問題がある場合には、1週間程度の日を空けて再発表日を設け、再発表を課すなど、単に義務として発表さえすればよい、という安易な考えに陥らせないようにしている。2009年度には約10名の卒研が再発表の対象となった。

卒業研究再発表会は、卒研発表会当日に病気、事故などの理由で発表できなかった者に対する追発表の機会を与える事にもなる。2009年度には1名の追発表者がいたが、無事合格となった。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

本学科では4年次前期に選択必修科目(6科目計12単位、卒業要件4単位)を配当している。通常、かなりの4年次学生は卒業研究以外の必要単位がそろっているため、授業を受ける学生が極端に少なくなるものと思われる。こういった状況を勘案して、4年次に選択必修という形で学科教育の総仕上げともいえる先進の講義を配置し、そのいくつかを履修させ、エンジニアとしての素養を高めると共に、卒業研究にも反映させるべく工夫をしている。

6．添付資料

特になし

金融経済学部 アセット マネジメント学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

「企業の求める人材の育成」を標榜するアセット マネジメント学科においては、学生の「仕事としての目的意識」形成が遅れ気味であることを考慮し、学科のコース選択を“緩やかに且幅広く”、実行してもいいようなカリキュラムの位置付けと各種特別講座の配置をおこない、コース選択の弾力化と多様化を図るようにした。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

①「企業の求める人材」は「情報・知識を丸暗記する」詰め込み人間でなく、「自分で考え、論理的思考を行い、文章を作り、意思を伝達する(コミュニケーション能力)ことに自立している人間であり、このために参加型・能動的授業を更に進める。②また共同研究室である利点を生かし、学科内で情報交換を煩瑣に行い、各科目間の連携を取っている。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

①学生指導については、個々教員による少人数「個別担任方式を」改めることとした。これは個々教員の指導方法によってかなり差が出る方法より、画一的・統一的な指導のほうが公平感があり、説得力があると判断したもの。2010年度より「教員担当制」を導入し、学生指導については学年別総合カウンセリング担任を配置すると同時に、キャリアー担当、資格支援特別講座担当等機能別担当を配置した。②当然のことながら、教授会での情報交換に基づく早めの対応、また学部企画の各種施策(資格取得・履修・機能別担当制等)についての適宜ガイダンスの実行、更に授業出席・必修履修状況等について個別カウンセリングする点は言うまでもない。

4．卒業研究指導について

現在なし

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

①大学時代の勉強を、客観的評価するものとして資格取得が大切であるが、本学科においては「資格取得支援体制」を導入した。

②大学教育において「出口戦略(就職サポート体制)」は大きな評価要素であるが、本学科においては、まず2009年度「企業アンケート」を実行し、本学科の認知度、採用の要素、等を調査した。2010年度は、(i)アンケート反応企業訪問によるインターンシップ依頼(ii)情報を要望している企業には、大学・学科パンフ、資産運用フォーラム等各種情報を提供する等の中期的接触を図る。また出口戦略担当教員を配置し、「学生の仕事としての目的意識から始まって、エントリーシートの書き方、面接の受け方等」の実践的個人別就職サポート体制を敷く。

6．添付資料

特になし

1．教育目標やカリキュラムの位置づけ、シラバスについて

教育目標は、医用工学系は ME1，2種実力検定試験、臨床工学技士国家試験受験に合格すること、医療情報系は医療情報技師資格、福祉工学系では福祉分野でのエンジニアの養成を目標の一つとして明確化している。

2．教育改善や授業点検、成績評価について

ME1，2種実力検定試験や臨床工学技士国家試験の過去問を e-learning にて行い、成績向上、資格取得に役立てている。また、国家試験の直前では国家試験対策ゼミを分野別に行い、合格率向上に努力している。

3．学生指導（履修指導、教育相談、生活相談、教育指導）について

1、2回生までは担任制にて履修指導、教育相談、生活相談を行っている。3回生では7月よりプレゼミとして研究室配属を行い、研究室単位で指導を行っている。また、就職指導では、就職意識を高めるために病院見学や企業見学を行い、さらに医師、臨床工学技士などの医療従事者や企業の方を招き講演会を開催している。

4．卒業研究指導について

卒業研究指導は3回生前期より行い、12月に卒業研究発表会を全員参加の下で行っており、卒業研究発表会での質問事項、改善点に対して追及研究も行っている。さらに、病院、福祉現場等でのデータ収集を行い、各分野での学会発表、参加も積極的に行っている。

5．その他、特記事項（学科独自の教育など）など

本学科では、実学の重要性を低学年から理解するように、学休期に病院見学、企業見学を自主参加として行っているが、大変好評であり、学生の勉学意欲向上に大いに役立っている。また、心電図の勉強では高学年の学生が低学年に教えるなど、先輩から後輩への指導が定着し、病院では即戦力としての期待度が高く評価されている。同時に、先輩・後輩の関係を学ぶ人間形成にも役立っている。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

(ア) 教育目標の設定と説明

教育目標の設定については、前年度学科会議において学科における確認を行っている。特に、最終目標である理学療法士国家試験合格レベルへの到達目標を達成する上での進級判定基準、単位認定基準の確認を励行している。

また、各科目の試験問題作成においても各教員の基準を統一するため、問題に国家試験の過去の問題を挿入することなどの取り決めを行っている。本年度、初めての卒業生をだし、国家試験受験に至ったが33名受験33名合格となった。

(イ) カリキュラムの位置付け

入学時、新年度開始時におけるオリエンテーション期間に、その学年の各科目の階層性、有機的関連性を説明するばかりでなく、4年間のカリキュラム全体の中での位置づけなどを各学年ごとに説明している。

新入生については、教養科目の位置づけ、専門基礎科目の意義、位置づけを繰り返し説明し、専門性の概要を講義する理学療法概論の講義中にも臨床的事象を例にとり、解剖学、生理学、機能解剖学など同時進行している基礎専門科目の学習内容を具体的に列挙しその関係性を理解させようとしている。その他に、本学理学療法学科の特徴としての身体の工学的モデルの理解を各科目の中で取り入れ、卒業研究などへの関連づけを行っている。

新カリキュラムの編成に関しては、国家試験合格と臨床実習通過の目標を掲げ科目整理と追加を行った。

(ウ) シラバス

専門科目については、シラバスに各項目名を明示しても初学者に理解できない専門用語が出る場合、概略のみを示し、講義進行中の学生の反応や理解度を確認しながら進行計画を示す工夫を行っている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

定期的に、授業内容で、既習の事項の理解がなされていない場合、報告しその原因を分析し、繰り返し講義するなどの対策を講じている。

また、運動学などの専門科目で、領域を分け、運動学1、運動学2と分割している場合、定期試験の合格者や平均点のばらつきが出た場合など、試験のレベル、講義内容のチェックを担当者同士で行っている。

国家試験準備に関して、精神的動揺や不安に対応するべく合同勉強会形式をとった。これは、学年全員を国家試験当日と同様の時間配分で同一教室に入室させ、国家試験準備を行わせるものである。また、学内国試模擬試験を週1回実施し、不正解の問題の解消を目標として繰り返し、準備を行わせた。

当初の予想通り、この形式では落ち着いて勉強できないなどのクレームが出たが教員の統一見解として、国試直前までの準備形式として継続することを宣言し、理解させ継続させた。問題点は、時期的にインフルエンザなどの感染防止に注意が必要であった個々の研究室の備品の加湿器などを設置し予防に努めた。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

学生指導については、国家試験や総合臨床実習などの準備を十分に行えるよう研究室配属を3年時に行い、研究室指導教員が中心となって定期的に個人面談を行っている。1年2年次に対しては、グループ担任が中心となって、面談を行っているが、教員によっては、担当講義が少ない学年があり、行き届かない面もあり、低学年の講義担当者がグループ担任に関わらず、講義中の態度、挙動などについて問題がありと判断した場合は、学科会議などで逐次報告し担任、主任の対応へと引き継いでいる。その際、必要であれば、主任、担任の複数で学生と保護者に対する面談を行っており、さらには、学生相談室の相談員も交えた面談に至った例もある。

4. 卒業研究指導について

理学療法学科の特徴の一つであるが、業務守備範囲が広く多岐にわたる科目の総合的な理解の促進の為に、卒業研究を行っているが、臨床実習などで行われるケーススタディにもその役割を担わせており、両者が、最終学年の学生にとって過重な負担にならないよう卒業研究のレベルについて高すぎる目標設定にならないよう教員間の連絡を密にし指導している。さらに、最終学年が、総合臨床実習と国家試験準備に忙殺されることを考慮し、研究室配属を実質的に3年次とし卒業研究の作業を3年次でほぼ完了できるようにしている。

5. 特記事項

学科学生全員が理学療法士の国家試験受験資格取得が卒業要件となるため、臨床実習完了が必須条件となる特殊な事情がある。従って、基礎知識、基本的検査・治療技術など一般的知識の底上げに加え、基本的資質の涵養を教育目標の柱に挙げる必要がある。このため、論理的思考能力の習得は勿論のこと、コミュニケーション能力が患者との良好な関係構築の必須条件となる。

医療福祉工学部 健康スポーツ科学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

健康スポーツ科学科の教育目標は、

- (1) 健康スポーツ科学について、広い基礎知識と実践技術を有し、かつ高い専門知識と応用能力を有する者
- (2) 健康スポーツ科学科で学んだことを活かし、社会における問題点を発見し、それを解決することができる者
- (3) 人間性、社会性、国際性を有し、自身が成長するとともに、社会の発展に貢献することができる者を養成することとしている。

カリキュラムは、その教育目標を達成するために、スポーツ科学コース、健康科学コース、健康機器開発コースの3つのコースに分け、コースに沿った専門的な授業と1年生から4年生への系統的な授業を組み合わせて構成している。また、医療福祉工学部、理学療法学科の科目を他学科履修でき、学生一人一人に合った時間割を作成できる。

シラバスは、教育を効果的かつ効率的に行うために、それぞれの科目の他の科目との関係、他の教員の科目との連携を考慮して作成している。そのために、教員間で授業内容を話し合い、重複する部分、不足する部分ができるだけないようにしている。また、学生が授業内容を理解しやすいように、授業目的を詳しく説明している。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

教育改善については、授業科目や担当教員、開講時期や履修人数などが問題になっているが、学科会議等で問題点を話し合い、対策を検討している。授業点検については、授業アンケートを実施し、学生の意見も考慮して授業改善に取り組んでいる。

成績評価については、1年目は学生の理解度が教員の基準より下回った。そのため、2年目の授業で教える内容を学生に合わせる、繰り返し説明する、ゆっくり説明することにより対応した。その結果、2留生の発生を防止することができた。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

履修指導については、1年生はオリエンテーションにおいて、2年生は年末のカリキュラムガイダンスにおいて、丁寧に行っている。時間割については教務委員、教職課程については教職課程委員、資格については健康運動指導士担当、トレーナー担当教員が説明する。履修登録時にも全教員が出席し、学生一人一人の質問に回答する。

教育相談、生活相談については、1年生はオリエンテーション、成績配付、教育懇談会において、2年生は成績配付、教育懇談会においてグループ担任が面接を行う。研究室への配属は3年生前期を予定しているので、3年生、4年生は卒業研究担当教員が面接を行うことになる。問題のある学生については、学科会議で話し合い、グループ担任が個人指導している。特殊な学生(肢体不自由)については、グル

ープ担任だけでなく、全教員が参画し、学務課とも連携して、学生の生活をサポートする体制をとっている。

健康スポーツ科学科は、開設3年目であるので、卒業生の輩出は2年後となる。しかし、就職指導は重要であるとの認識から、1年生からキャリア教育を実施する必要があると考えている。就職指導については、就職対策委員を2名配置しているが、全教員が参画し、進路支援室とも連携して、学生の就職を支援する体制をとっている。

4．卒業研究指導について

健康スポーツ科学科は、開設3年目であるので、平成23年度から卒業研究指導が始まる。研究室への配属は3年生前期を予定しており、卒業研究発表会は4年生の1月、卒業論文提出は2月を予定している。3年生後期のプレゼミを通して、卒業研究の準備をし、教員は**学生一人一人**に合った卒業研究指導を行うことになる。

5．その他、特記事項（学科独自の教育など）など

学生の資格取得を支援する教育を実施している。スポーツ科学コースでは保健体育教員やスポーツ指導員、健康科学コースでは健康運動指導士と健康運動実践指導者、健康機器開発コースではITパスポートや福祉住環境コーディネーター等の資格の取得が可能である。コナミスポーツ&ライフと提携し、実践的な教育を実施している。来年度以降、実習、研究または就職において多くの成果が期待される。また、クラブ活動に参加する学生も多く、クラブ活動を通して人間性教育、社会性教育を実施している。

6．添付資料

特になし

総合情報学部 デジタルアート・アニメーション学科

1．教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

学科の教育目標は、自立的にものごと考える力があり、コンテンツ制作のための創造力と技術力を備え、それを発信するコミュニケーション能力と社会性を身に付けた人物を育てることにある。この意味するところは、学科の教育目標が単にデジタルクリエイターを育てるということではなく、職種を問わず幅広い分野において社会で活躍できる人物を育てるということでもある。

昨年度から学科内に設けたWG「カリキュラム改訂委員会」を中心に新カリキュラム(平成23年度)の原案を作成し、学科会議で検討してきた。22年度の夏ごろまでには成案を得たいと考えている。作成にあたっては、「思い描く」「創造する」「発信する」というコンセプトをもとに、コンテンツ制作のコア科目をまず設置し、次にその関連科目を配置した。また、学生の職業意識の向上と就職対策を目的として、現行カリキュラムの1年次にある科目「キャリアデザイン」を2,3年時にも増設した。さらに、卒業研究・制作を必修とすることにより、学生を自立した人間として社会へ送り出す体制の強化を図ることにした。

2．教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

前年度は学科内にWG「情報共有委員会」を設置し、科目内容の点検を行ったが、その成果と23年度新カリキュラムでの改善点を少しでも早めに教育に反映するために、科目担当者の一部変更やシラバスの変更を22年度から行うことにした。

講義科目については、私語などに対する学生の苦情がある科目があった。この点についてはさらなる対策をオリエンテーション時期から始める予定であるが、同時に教員が各授業において意識的に学習態度の向上に取り組むようにしたい。

演習科目については、単なる技能・技術の習得だけではなく、コミュニケーション力をつけるための方略としてグループワークを従来から多く取り入れている。コンテンツ制作現場はもちろん、一般企業でも共同作業は重要であるので、学生によってはグループワークの苦手なものもいるが、学科の方針として今後も従来以上にコミュニケーション活動を重視していきたい。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

「ゼミナール入門」(1年次前期)は、学生が学科でどのような学生生活を送っていけばよいのかという指針になるような科目として位置付けている。専任教員がリレー式に講義をし、学生が学科での学習や将来像をイメージしやすいように配慮している。学外でプロのコンテンツ制作者として活躍している教員の講義は学生にとって特に刺激や励みになっているようである。

学生の生活面についてはグループ担任のまとめ役の教員を決め、その教員に情報が集約されるようにしている。また、学生の休学、退学といった問題があった場合には、本人だけではなくできるだけ保護者とも直接または電話で話をするように学科では確認している。精神的な問題を抱えている学生が予想外に多く、情報共有ということを全教員が強く意識しており、学科会議では学生の状況について毎回確認してきた。

就職については、入口科目・出口科目を設定しているが、それにとどまらず日頃から学生の職業意識を

育むように教員は努めている。また、進路支援室の有効利用についても指導してきた。しかしながら、今年度は各研究室の就職率は非常に悪いという現実がある。そこで、次年度は職業意識の向上といったことは当然であるが、履歴書やエントリーシートの作成といった技術的な指導について就職部と協力しながら強く進めていきたい。また、学生の文章力の低さが問題となっており、この点については、「ゼミナール入門」で毎回作文の提出を求め、さらには他の授業でも文章作成の機会を多くするなど、文章を書く習慣作りに努めたい。

4．卒業研究・制作指導について

卒業研究・制作の発表会である「なわてん」については、今年度もW学科と共同開催し、同時にT学科特別研究展を開くなかで成功裏に終えることができた。教員の熱心な指導もあり作品レベルは年々向上してきている。学外での開催も考えるべき時期なのかもしれないが、予算面での苦労が今以上に予想される。卒業研究や卒業制作作品は外部からの評価の対象となり、ひいては学科の評価につながるもので、質の向上にさらに学科として取り組んでいく予定である。

2010年度からは、オープンキャンパスの期間に学科の全研究室を開放し、卒業研究・制作の中間発表の場とすることを決定した。これにより、学生の動機づけのみならず外部に向けての情報発信のよい機会となることが期待される。

今年度はほとんどの研究室において就職率がきわめて悪かった。この点は学科内でも討議をし、学生の就職意識の向上に各教員は努めてきたが、反省する点の多い結果となったのも事実である。次年度には、各研究室で学生の就職活動の実体を把握し、具体的な行動を伴う指導をしたく思っている。学生の気質や将来像が他学部の学生とは異なる面があり、難しい点もあるが、就職を望む学生の援助には学科としての協力体制の強化を図りたい。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

(1) 2009年度からはじめて中国人留学生13名を2年次に編入生として受け入れた。留学生への事前指導として、前年度に引き続き今年度もQとWの教員が提携校の江南大学で講義と演習を行った。同校での授業は学生から好評を得たとの報告を得ている。

留学生たちは全員授業にも熱心で、学業成績も極めて良好であり、充実した学生生活を送っているように見受けられる。留学生対象に国際交流センター主催で国際交流授業が開催されたが、受講生には特別活動の単位を認定することとした。

(2) 今年度もシェリダン大学との交換留学を計画したが、同校サイドのストライキという不測の事態により、中止せざるを得なかった。同大学へ短期留学した学生達は、学習面や生活面で大いに刺激を受けて帰国し、他の学生にもよい影響を与える傾向があるので、次年度にはぜひ実現したい。

(3) 学生とプロの教員スタッフとの共同プロジェクト「電 Ch!」によるWebコンテンツ・コンペが企画実行された。企画のうちの1つである実写映像作品「おかつばちゃん旅に出る」の撮影のために学生は教員とタイ国まで出かけるなど、コンテンツ制作の貴重な経験をすることができたと思われる。こうした活動を通じて学生はプロの厳しさを学ぶだけではなく、学習に対する意識も前向きに変わっていくようなので、学科とし

ては今後もこの活動を支援していく予定である。<http://denchan.tv>を参照のこと

(4) 学外でのインターンシップや JIAMS との産学協同のコンテンツ制作により参加学生は力をつけているようであり、就職へつながる可能性も大きいと考えている。

6 . 添付資料

卒業研究・制作については、2009年度卒業研究・制作発表要綱ならびに「なわてん図録2010」をご参照ください。

総合情報学部 デジタルゲーム学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

2008年度の学科専門科目カリキュラム改訂において、学生の興味関心と学科の人材育成目標との最適化を図ることを目的に、従来の3コース制から新たに6ユニット制へ変更し、学際領域を横断的によりダイナミックに学べる自由度の高いカリキュラムへとアップデートした。具体的には、情報工学系科目群としてScience・Development・Systemの3つのユニット、芸術デザイン系科目群としてArt & Design・Graphicsの2つのユニット、企画プロデュース系科目群をEntertainmentとして編成している。

選択肢の増加は学びの自由度が上がる一方で、学生各自のカリキュラム設計を複雑にしてしまう負の要素も併せ持つ。その点を解決するツールとして、履修をサポートするための4年間のカリキュラムリストを制作しガイダンス時に配布している。新カリキュラムへの移行2年目を迎えたが、学生各自の興味領域や志向が、明確に履修科目の選択に現れていることが見て取れる。

1年次生を対象に前期土曜日の集中開講による「大学入門」を総合科目群の中にデジタルアート・アニメーション学科と合同で独自に設定し、大学での学びのシステムやスタイル、またその活用方法について理解を促している。同様に、1年次前期開講の「日本語表現法」においても、環境適応性・自主性・協調性を、自然に身に付けさせることを目的として、自己分析と自分表現を出発点に、グループワークでの企画立案・コンテンツ制作を体験させ、最終的にはプレゼンテーションまでの流れを形成し、学科における学生各自の立ち位置を相互に理解し合う場としても機能している。

これらの科目は、学生相互の人間関係の形成に大きく影響するものであり、初期段階でのドロップアウトを防ぐ効果もあると考えている。

4年間を通して、グループ単位で主体的活動をおこなう授業の組み立てを多く配置し、社会から期待されるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力をはじめとした人間力の育成を意図している。

シラバスの記載に際しては、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

科目の目的では、この科目を学んで身につけられること(知識、能力)ができるだけ具体的に分かるように記述している。

内容・目標は、実際に行なう内容に即した15回の記述を原則としている。

評価方法は、評価項目とその重みだけでなく、評価項目の意味するところの説明も記述している。

特に第1回目の授業ガイダンスにおいて、シラバスの内容を詳細に説明する資料を別途配布し、シラバスの内容が意味するところ、教員の授業観・学生観、授業方法について解説している。また、この科目での学習方法もアドバイスしている。

シラバスに記載した科目の目標や内容に対応する形で、科目において課す課題を明示し、学生の科目に対する理解をより促すよう配慮している。

2. 教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

成績評価については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

シラバスに記載した評価基準を、第1回目の授業ガイダンスで説明するとともに、中間テストや、定期試験の前に、それらを再度説明している。また、教育的配慮において、その評価基準を変更する必要がある時は、受講生にあらかじめ授業中に説明し、受講生が不利にならないような、変更にとどめている。

教育改善や授業点検については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

毎回到授業終了10分前には、その回のまとめを行ない、受講生にラーニングアウトカム（学んだこと）を、各自で整理するよう促している。

学生の志向と資質、技術の進展に合わせて、同一科目であっても、毎年、教授内容を柔軟に変更させている。

各回の授業概要を、授業開始までにウェブサイト上に公開し、授業終了以降も授業期間中は閲覧・参照できるようにしている。授業概要には、講義の要約や課題内容を記載し、自学のサポートとなるよう配慮している。

教育研究センターが中心となって実施している授業アンケートを積極的に取り入れ、授業改善レポートについても、真摯に回答するよう努めている。センターの集約によるウェブでの公開のみならず、授業内でもアンケート結果に触れ、担当教員としての見解を明確に示した。

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

新年度を迎える前に，各年次（新2年次・新3年次・新4年次）に対して，それぞれ学科教育内容に関するオリエンテーションを実施し、各年次での教育内容の主要なポイントを解説するとともに、教育目標を再確認することで学科教育に対するモチベーションの維持向上を促している。

また、編入生・転科生などに対しては入学時にほぼ一対一の履修指導を実施し、各自の入学以前の学修状況を鑑み、学科教育にスムーズに浸透していける履修プログラムの設計について指導している。

学生指導については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

質問や相談に訪れやすいように、授業で適宜アナウンスをしている。また具体的に、教員室のドアをいつも半開き程度にし、学生がのぞきやすい印象を持ってもらえるようにしている。

プログラミング技術について教える際、できるだけその技術が現場で使われている例を最初に示し、なぜその技術が必要なのかを理解させてから、詳細の説明に移っている。

デザイン系科目においては、デザイン思考の開発と表現技術の獲得の両面から教育指導にあたり、特に多様な表現形態について視る眼を養うことを意識し、課題作品の講評の際には学生作品1点ずつにコメントを付している。

心理的・精神的な問題を抱える学生については、カウンセラーとの密な連携を取って指導にあたっている。

就職活動に対するサポート（エントリーシート添削や会社見学の引率など）を実施している。

礼節の大切さと実践する気持ちよさを、毎回の授業で体感させることを徹底している。具体的には、授業開始時に大きな声で「おはようございます」と発声し、それに対して学生も「おはようございます」と返す。授業終了時に大きな声で「おつかれさまでした」と言い、それに対して学生も「おつかれさまでした」と返すというものである。

協働の精神、個人の社会性の向上、社会への寄与の研究姿勢を持たせ、生の声を直接聞き、変化する社会を表と裏から見ること、現場意識と政治への関心、実践力をつけることを強く意識している。フィールドで生の実態を掴むと同時に、学術的態度として俯瞰的、普遍的、根源的なものの見方をさせるようにしている。

編入生および留学生については、それぞれを対象とした履修指導を実施している。また、履修登録時においても事務職員による説明会に学科教員を配置し、個別の質問などに対応できるよう配慮している。

4．卒業研究指導について

卒業研究・制作指導については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

研究室でのゼミ以外に、毎月、学外者（他学科、他大学、企業関係者）との研究会を開催し、視点・視座・価値観の多様さが重要であることを意識させている。さらに議事録を書かせ、ドキュメンテーション力を高めている。また、その場で3ヶ月に1回は、研究報告もさせ、プレゼンテーション、コミュニケーション力の実践的能力の育成をしている。

定期的に学外者（OB、他大学教員、企業関係者）と合宿ゼミを開催し、集中的な討議の経験をさせている。そこでは、新入社員としてのマナーや基礎知識の訓練もおこなっている。

他大学の研究室に見学に出かけ、研究に対する取り組みの姿勢やレベルの参考にさせている。

3年次後期の研究室配属決定後、ゼミ所属学生個々が講師となって、各自の興味領域について講演をおこなう課題を課している。ゼミ生相互の個性を理解する一助とするとともに、講演のための資料準備やプレゼンテーションを通して、その後の研究・制作発表への導入としている。

4回生時から積極的に学会発表（ゲーム学会、電子情報通信学会、情報処理学会、芸術科学会など）をおこなっている。

学外での作品発表（ET2008、なわてふれあい商工まつりなど）をおこなっている。

積極的にコンテストやコンペティション（文化庁学生CGコンテストなど）に応募している。

自治体や地域との連携として、寝屋川市まちづくりに関する市民意識調査をゼミで実施するなど、制作・研究テーマとして地域貢献（寝屋川市の防犯、防災、経済活性化策など）を主題にしている。

5．その他，特記事項（学科独自の教育など）など

学科独自の教育としては、以下の取り組みがあげられる。

入学後早期に学生の把握をおこなうことを目的に、新入生の顔写真撮影を実施している。

ノートパソコン導入教育(5~7コマ)を実施している。学科教材としてのノートパソコンを学生生活に中で有効活用するために、初期段階で集中的なリテラシー教育を実施している。

4月から5月の期間は、特に新入学生の動向についての情報交換を、学科会議および学科メーリングリストを通じて頻繁におこなっている。

年度当初には学科教育に参画いただいている非常勤講師の方との懇談会を実施し、学科教育目標や科目連携の確認をおこなうとともに、幅広い専門領域を持った教員相互の親睦を深める機会としている。

TA・SA講習会を実施している。学外から招聘している演習補助員の方の協力をいただき、大学院・学部の学生のTA・SAとしての教育指導力向上を目的に、2008年度に初めて実施した。今年度は大学院学生数も充実しているため、大学院2年次生を中心に自主的な運営をおこなう予定である。

5月中旬に新入生歓迎会を実施している。単なる懇親の場としてだけでなく、「日本語教育法」の授業内で形成されたグループごとに、ショートプログラムを企画・実施し、授業との連動による教育的な側面も加味したイベントとなっている。

Tokyo Game Showへの出展を、学内コンペ形式で展示作品の選考をおこない実施している。授業内でのコンテンツ制作指導を端緒として、授業外においても学生の自主的なグループ編成によるコンテンツ制作に取り組む体制が形成され、授業の枠を超えて学科専門教育の見地から教育効果が非常に高いプログラムであると判断している。

総合情報学部としてカナダ・シェリダンカレッジとの短期交換留学制度を実施している。国際コミュニケーション能力の養成という観点で、参加学生の成長は著しいものがあると感じている。

中国・江南大学との国際交流協定のもと、デジタルアート・アニメーション学科、デジタルゲーム学科両学科教員の現地での出張講義を実施している。日本語能力を研鑽中の学生が対象であるため、チームティーチングの実施や教材の検証・開発など授業運営の工夫が必要であり、本来の設定目的とは別に教員研修としての機能も併せ持っている。

3年次前期開講の「プレゼミ」においては、専任教員の各研究室の研究・制作テーマや指導内容などについて、理解を促すためのプレゼンテーションを実施し、卒業研究・制作への導入として位置付けるとともに、SPI模擬試験の実施など進路選択の端緒としても捉えて授業運営をおこなっている。

インターンシッププログラムは、学科設立後3年次を迎えた段階で実施し、これまで継続的に展開している。教員のコネクションを通じた企業開拓や四條畷学務課・進路支援室の協力を得て、一定の企業数を確保して実施している。プログラムを修めた学生は、就業体験を通して協働の精神とコミュニケーション能力の重要性を強く認識し、その後の学生生活を送っている様子がうかがえる。

オープンキャンパスにおいて、学科学生主導のイベントを企画運営している。在学中に自分の所属する学科を客観的に分析し、学生の目線で学科広報の方向性を具体的に企画するイベントプロデュースを通じて、来訪者に対する学科のアピール向上と同時に、学生の専門分野の見地からの教育効果も併せて意図したものである。

卒業研究・制作発表会および「なわてん」の実施に際しては、4年次生の研究・作品発表の場として、その準備運営にはゼミに配属された3年次生が、教員の指導のもとあたっている。

学科設立当初から、教員相互また学外からの来訪者による授業参観は頻繁におこなわれていたため、授業参観については自由に受け入れる学科の雰囲気が形成されている。

TA・SA講習会を実施している。学外から招聘している演習補助員の方の協力をいただき、大学院・学部の学生のTA・SAとしての教育指導力向上を目的に、2008年度に初めて実施した。今年度は大学院2年次生を中心に実施・運営にあたった。

6．添付資料

特になし

総合情報学部 メディアコンピュータシステム学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

教育目標

本学科では，以下の教育目標で理工系の情報教育を行っている．

- 進化し続ける IT 技術の基盤となる知識の獲得
- 即戦力となり得る実践力の育成
- コミュニケーション能力などを中心とした社会性の向上

カリキュラム

本学科のカリキュラムは，ACM(世界最大のコンピュータサイエンスの学科)が策定した標準カリキュラム CC2001 に対応している．2005 年の学科開設に合わせて，上述の教育目標に基づいてカリキュラムを設計した．その後 4 年間の運用を踏まえて，2009 年度入学生から新カリキュラムを開始した．新カリキュラムでは，コース制を規則化し，実習・演習科目を増やし，企業との連携授業を導入する．

JABEE

コンピュータサイエンス教育プログラム（略称 CS コース）を設け，外部第三者評価である JABEE（日本技術者教育認定制度）の認定を目指し，教育の質やサービスの向上に努めている．また，JABEE 認定を受けないコース（IP コース）の学生に対しても，各科目における合格基準は同一にしている．

シラバス

本学科の専門科目のシラバスにおいては，「授業の学習・教育目標」「授業スケジュール」「合格基準」「評価項目」を必ず明示するようにしている．

2. 教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

教育改善・授業点検

JABEE の認定を目指すべく，各教員が統一された方針で授業の質を高めることを心がけてきた．2009 年度から学科内に FD 担当教員を定め，FD 会議を開き，半期に 1 回授業の点検を行っている．

2009 年 10 月に JABEE の審査を受けた．その評価を踏まえて，今後さらなる教育改善を進めていく．

成績評価

本学科の方針として，成績の相対評価は行わず，シラバスに明示した合格基準と評価項目に基づき絶対評価を行っている．その結果として，科目によっては合格率がかなり低いものもあり，学科の平均としても他学科に比べると低い．また，半期の授業で 4 回以上欠席すると未受験扱いにするというルールを設けている（シラバスに明記）ため，受験率は低くなりがちである．これらの傾向は，合格者のレベルを保証するためある程度はやむを得ないが，一方で授業の改善も必要である．

3．学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

履修指導

年度末や年度初めに設けられた学科オリエンテーションの時間以外に，1年生向けには「ゼミナール演習1」，2年生向けには「ゼミナール演習2」の中で，学科の教育の方針やJABEEや履修のポイントについて説明を行っている。

教育相談・生活相談

グループ担任の方法にはこれまでに試行錯誤があったが，2009年度入学生に対しては，学生を5グループに分けて，1グループにつき主任1名，副主任1名の教員が担当した。

2009年度の新入生オリエンテーションでは，初めてアイスブレイキングを導入した。また，5月11日に新入生歓迎会を実施し，学生同士や学生と教員が打ち解けるように工夫をした。

1年次の必修科目である「ゼミナール演習1」においては，グループ別の授業の回を設けて，担任教員に話をしやすいようにしている。また，この科目で欠席が多い学生に対しては，担任から本人や家庭へ連絡するようにしている。

就職指導

2009年度は，1年生向けに「ゼミナール演習1」の中で2回，2年生向けに「ゼミナール演習2」の中で6回，キャリア形成のための授業を実施した。また，3年生向けに学科独自の進路ガイダンスを7月24日と2月10日に開催した。さらに，就職活動が本格化する4年生には，学科独自に定めた「就活状況月例報告書」を毎月指導教員に提出させ，その際に面談をして一人ずつに指導を行った。また，7月10日には学科主催の企業説明会を開催した。

4．卒業研究指導について

本学科では，3年次で「卒業研究」を行っている。2年次の7月に配属の研究室を決定し，2年次の後期にプレゼミを行い，3年次の年度初めから卒業研究を開始し，3年次の年度末に終了する。卒業研究の合格を4年次への進級条件にしている。また，3年次の月～金曜日の3,4時限に卒業研究を割り当てており，原則としてこの時限に他の科目を受講することはできない。

上述のような制度によって，学生に十分な時間をかけて能動的な学習を行わせ，問題解決能力，プログラミング能力，プレゼンテーション能力などを修得させる。これを3年次の年度末までに終えることによって，身に付けた能力を就職活動に役立てることも狙っている。

学科の方針として，研究テーマは一人ずつ異なり，複数人で1テーマは認めていない。合格の基準として，学習・教育目標の達成に加えて，540時間以上の従事，中間報告（口頭発表）2回，20ページ以上の論文，最終発表（口頭発表），1000行以上のプログラム（CSコースのみ）を定めている。論文と最終発表は複数の教員で評価を行い，合否を判定する。

最終発表会では，各研究室から選抜された学生による優秀研究セッションを設けている。これらの学生は全教員で評価し，最優秀研究を選定する。上位の学生は，当該年度の学業優秀賞に推薦している。

本学科では，以上のように独自の方法で卒業研究を実施しており，学生の能力向上に効果を上げていると思われるが，一方，途中で脱落する学生が少なからず存在する。2009年度では，この年度から新たに卒業研究を始めた学生85名のうち，同年度末に合格したのは62名（72.9%）であった。また，指導にかかるコストの割には，就職の実績につながっていないのではないかという意見もあり，実施方法につ

いては、さらなる検討が必要である。

なお、研究をさらに続けたい学生や大学院進学予定者のために、4年次配当の選択科目として「特別研究」を設けている(CSコースでは必修)。2009年度のこの科目の合格者は9名であった。

5. その他，特記事項（学科独自の教育など）など

学科指定ノートPC

学科開設の2005年度から毎年新生に学科指定のノートPCを購入させている。このノートPCのハードディスクは、学科独自に設定したもので、WindowsとLinuxのデュアルブートが可能であり、学科の授業に必要な各種のソフトウェアがあらかじめインストールされている。このPCを活用して、プログラミング能力やコンピュータ運用能力を向上させることを狙っている。また、後述のe-Learningを利用して、一般の授業にも役立っている。

E-Learning

MC2の協力を得て、ウェブベースのe-LearningのMoodleを学科として積極的に活用している。2009年度では、Moodle上に30以上の科目のコースが設けられていた。また、一般の授業以外に、研究室単位のプレゼミや卒業研究の運用にも利用されている。

課外活動

「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」に出場する有志学生の課外活動を学科として支援している。また、コンピュータグラフィックスに興味のある学生のために「メディコンプロジェクト」と称する課外活動も実施している。

6. 参考資料

1. 資料1 メディアコンピュータシステム学科パンフレット
<http://cs-oecu.sakura.ne.jp/wp-content/uploads/2009/07/cs-oecu-leaflet09.pdf>
2. 資料2 メディアコンピュータシステム学科ウェブページ
<http://www.cs-oecu.jp/>

2008年度クラス分け結果(数学)

Aクラスは基礎解析・演習, Bクラスは微積分1・演習
EGHJNZPFL 合計 823

EHN	クラス人数	E学科	H学科	N学科
A-1 クラス	56	56	0	0
A-2クラス	57	10	47	0
A-3 クラス	57	0	35	22
B クラス	70	25	30	15
計	240	91	112	37

GJZ	クラス人数	G学科	J学科	Z学科
A-1 クラス	57	0	57	0
A-2 クラス	58	0	21	37
A-3 クラス	58	47	0	11
B クラス	66	14	37	15
計	239	61	115	63

PF	クラス人数	P学科	F学科
A-1 クラス	61	61	0
A-2 クラス	61	28	33
A-3 クラス	61	28	33
B クラス	68	56	12
計	251	173	78

L	クラス人数
A クラス	48
B クラス	45
計	93

2008年度クラス分け結果(数学)

線形代数1(単純に等分)
EGHJNZPFL 合計 823

EGJ	クラス人数	E学科	G学科	J学科
S-1クラス	91	91	0	0
S-2クラス	88	0	61	27
S-3クラス	88	0	0	88
計	267	91	61	115

HF	クラス人数	H学科	F学科
S-1クラス	63	63	0
S-2クラス	63	49	14
S-3クラス	64	0	64
計	190	112	78

NZ	クラス人数	Z学科	N学科
S-1クラス	50	50	0
S-2クラス	50	13	37
計	100	63	37

(注: 後期は1クラス)

P	クラス人数
S-1クラス	57
S-2クラス	58
S-3クラス	58
計	173

(注: 後期は2クラス)

L	クラス人数
S-1クラス	46
S-2クラス	47
計	93



2010年度3年次 基礎理工学科の 授業 カリキュラム

2010年3月24日11:00~@J514

大阪電気通信大学/工学部
基礎理工学科

基礎理工学科の進級・卒業要件

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	24~40単位							
特別基礎科目	6単位							
基礎専門科目	数学	24~40単位 必修3/ 選択21~37						
	理科							
	情報							
	工学入門							
専門科目	数理モデリング	56~80単位 必修17/ 選択必修2~4/選択27~53						
	計測シミュレーション							
	理工学インテグレーション							
	その他							
卒業研究								

目次

新3年次のためのガイダンス

1. 進級・卒業要件
2. 基礎理工学科の4年間とコース分け
数理モデリング、計測シミュレーション、教職(数学)、教職(理科)
3. 3年次カリキュラム[時間割]と授業科目から
 - ・「数理モデリングゼミナール/科学計測ゼミナール」
 - ・「キャリア実践」(特別ゼミナール1)
 - ・「プレゼミナール」(→4年次卒業研究への準備)
 - ・「基礎理工学特別講義1」
 - ・「計測・シミュレーション特別講義」
 - ・「特別ゼミナール1」
 - ・「特別ゼミナール2」(インターンシップ)
4. 4月始めのオリエンテーション(履修登録など)

基礎理工学科の進級・卒業要件

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	24~40単位							
特別基礎科目								
基礎専門科目	数学	24~40単位 必修3/ 選択21~37						
	理科							
	情報							
	工学入門							
専門科目	数理モデリング	56~80単位 必修17/ 選択必修2~4/選択27~53						
	計測シミュレーション							
	理工学インテグレーション							
	その他							
卒業研究								

基礎理工学科の進級・卒業要件

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	40単位							
特別基礎科目								
基礎専門科目								
数学								
理科	総修得単位 66単位以上							
情報								
工学入門								
専門科目	56~80単位 必修17/ 選択必修2~4/選択27~53							
数理モデリング								
計測シミュレーション								
理工学インテグレーション								
その他								
卒業研究								

基礎理工学科の進級・卒業要件

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	卒業要件単位 128単位以上 「卒業研究」を含む							
特別基礎科目								
基礎専門科目								
数学								
理科	卒業							
情報								
工学入門								
専門科目	卒業要件単位 128単位以上 「卒業研究」を含む							
数理モデリング								
計測シミュレーション								
理工学インテグレーション								
その他								

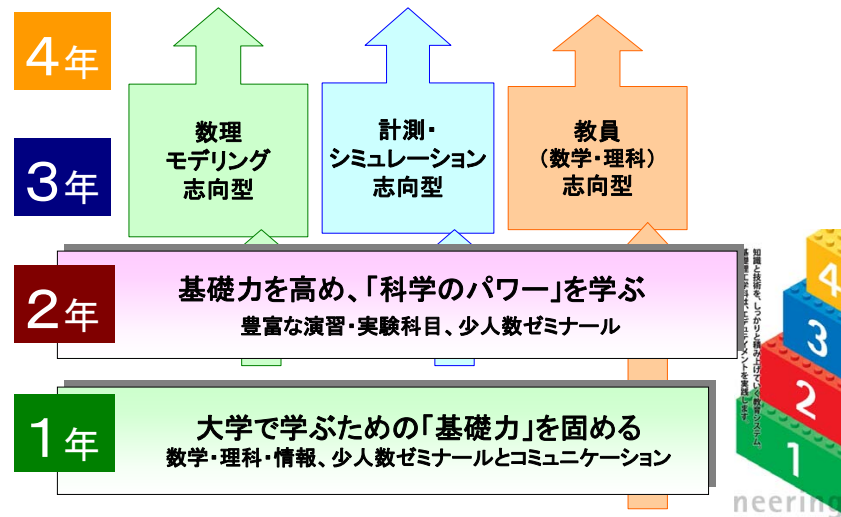


卒業

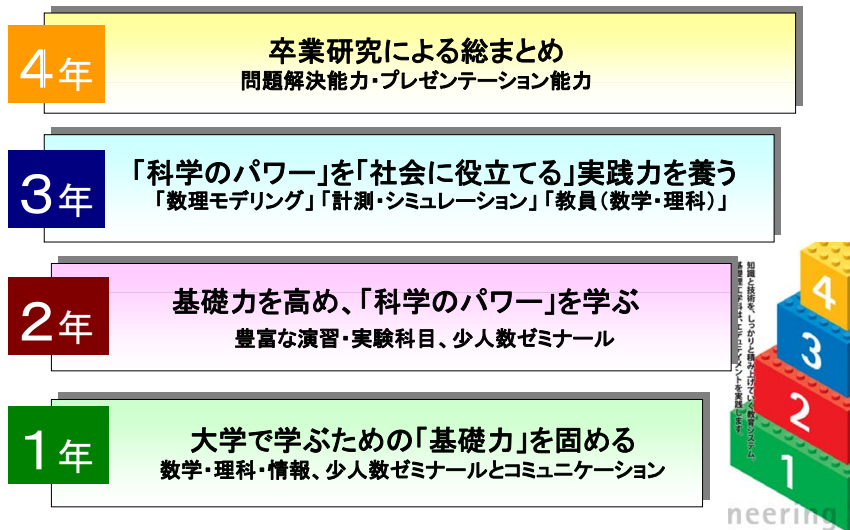
基礎理工学科の進級・卒業要件

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	卒業要件単位 100単位以上 「プレゼминаール」 を含む							
特別基礎科目								
基礎専門科目								
数学								
理科	卒業要件単位 100単位以上 「プレゼминаール」 を含む							
情報								
工学入門								
専門科目	卒業研究							
数理モデリング								
計測シミュレーション								
理工学インテグレーション								
その他								

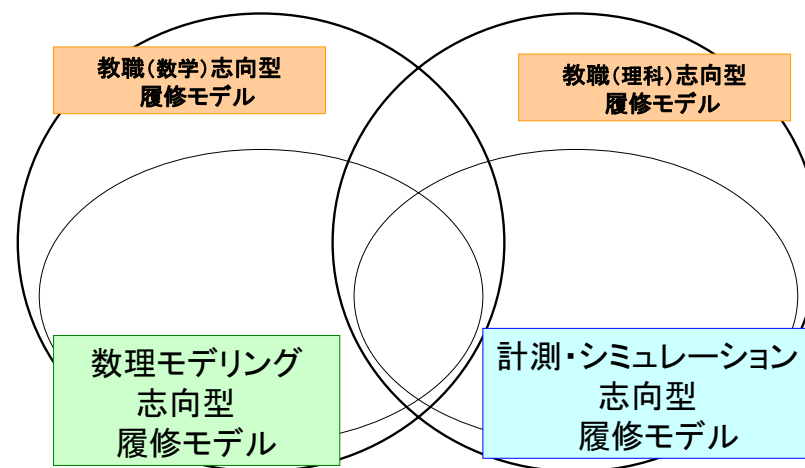
基礎理工学科の4年間



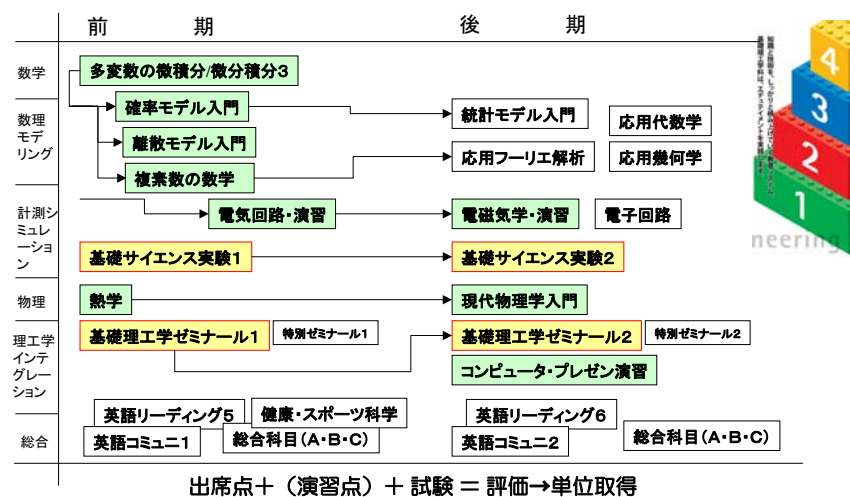
基礎理工学科の4年間



基礎理工学科の履修モデル

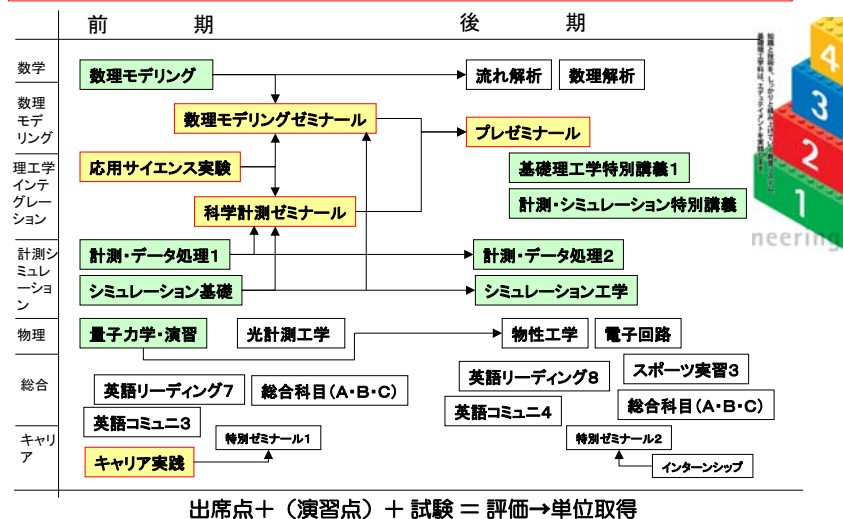


基礎理工学科2年次のカリキュラム



2年次は専門を学んでいくためのステップアップの時期。

基礎理工学科3年次のカリキュラム



3年次では専門を学び、「社会に役立てる」実践力を養う。

3年次開講される科目について（その1）

■数理モデリングゼミナール[前期・月3](選択必修)

■科学計測ゼミナール[前期・月3](選択必修)

どちらか一方を履修する。

数理モデリング志向型・教職(数学)志向型コース →坂田・中村・竹居
計測シミュレーション志向型・教職(理科)志向型コース →安江・溝井・原田

※本日、現時点でのゼミ希望のアンケートを行います。必ず提出のこと。

■プレゼミナール[後期・月5](必修:4年次進級の要件)

4年次卒業研究の準備と就職活動に向けて、卒業研究の担当教員のゼミナールに所属する。(23年度4年次進級を目指すものは必ず履修すること。)

数理: 萬代、吉松、木村、中村、竹居

科学: 福田、元場、奥村、大野、原田、安江、溝井、尾花

※ゼミナールの内容の紹介と配属方法については、説明会を改めて行う。

※ゼミが行われる時間帯は、所属したゼミで調整・変更される場合あり。

※4年次卒業研究は、原則として、プレゼミの研究室で行うことが望ましい。

3年次開講される科目について（その2）

■キャリア実践[前期・水3](必修に準じる)

社会人として身につけておきたい対人コミュニケーションや文書の書き方等を学ぶ。また、実際の就職選考において会社が大切にしている観点を知り、自分のよさや考えを自信をもって伝えられるよう練習する。

「挨拶、言葉づかいと敬語」「エントリーシートの書き方」「面接対策」...

■特別ゼミナール1

3年前期集中

上記「キャリア実践」で合格した場合、2単位を認定。

「キャリア実践」と「特別ゼミナール1」の両方を4月に履修登録すること。

3年次開講される科目について（その3）

■特別ゼミナール2(以下のいずれかで2単位)

・3年後期集中「インターンシップ」→大野先生から説明あり。

「インターンシップ」として2単位認定。希望者は3年次9月履修登録。

・3年後期集中「資格認定」

資格を2単位認定。資格を取得後に履修登録(2年次9月初旬履修登録→10月中旬～11月末書類提出→2月学科にて単位認定)

・(2年後期集中) A学科「科学技術産業社会」

(特別ゼミナール2の履修登録+A学科の「科目履修」の手続き)

■基礎理工学特別講義1[後期・水3](選択)

学内外から講師を招くなど、多彩な話題(物理科学分野)による講義をリレー形式で行います。

■計測・シミュレーション特別講義[後期・月3](選択)

学内外5名のシミュレーションのプロフェッショナルを招き、リレー形式でシミュレーションの最前線を講義します。

■教職生への注意

履修登録時の注意あり。

「教育課程論」「英語コミュニケーション3・4(英会話)」など。

年度始めのオリエンテーションなど

※必ず参加するようにしてください。

本日[3月24日(水)]・3月25日(木)

「教授要目(シラバス)」「学修必携」「履修登録の手引(時間割)の交付
教務課前にて

本日[3月24日(水)]

新3年次生対象ガイダンス「履修および就職に向けて」

14:40～16:10 場所:J302

4月 1日(木) 履修登録

3年次生 : 教室集合 2年次留年生 : 教室集合

4月12日(月) 前期授業開始

■学生ボランティア募集

「西はりま天文台新入生研修旅行」4月9日(金)-10日(土)詳しくは奥村先生まで。

2010年度 基礎理工学科 前期授業時間割表

注意:履修の際には、「履修登録の手引き」に掲載されている時間割表を必ず参照すること。

N1年 前期

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30	基礎解析・演習 NEH 中村,上田,竹内 微分積分1・演習	線形代数1 NZ 西村,村井	力学1・演習 NZ ①原田,②林内	化学1 NZH 中村	英語リーディング1 NZF 山崎,井田,中野,原
II限 10:40 12:10	NEH *田中	総合科目A群 教育学の世界 川地		基礎ゼミナール1 ①木村,②西村,③山原 ④安江,⑤原田,⑥福田	化学2 原田
III限 13:00 14:30	スポーツ実習1 NZ *原住,*林,高橋	生物学 NPG *奥山	基礎理工学入門 N学科教員	コンピュータリテラシー1 *藤本[M2]	工学基礎実験 奥村
IV限 14:40 16:10		英語リーディング3 *山本 中野語1 木子	(キャリア)大学適応と目標 N学科主任	ドイツ語1 NF *山口,*横田 フランス語1 NF *村尾	
V限 16:20 17:50			基礎英文法セミナー NHU *平尾 [H22入学生のみ]		

N2年 前期

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30		総合科目A群 (教職)地球科学 奥村 (教職)教職総合ゼミ1 岩本	基礎サイエンス実験1 奥村,福田		英語リーディング5 NE 坂本,*吉村
II限 10:40 12:10	熱学 *外川	総合科目A群 (教職)教職総合ゼミ1 平沼		複素数の数学 吉松	離散モデル入門 NG 中村
III限 13:00 14:30	微分積分3 NEH 萬代 多変数の微積分	基礎理工学ゼミ1 ① 山原,木村, ② 西村,原田 ③ 萬代,安江	(キャリア) 大学生活とキャリア N学科主任	確率モデル入門 NF 竹居	電気回路・演習 大野
IV限 14:40 16:10	(教職)生活化学 実験①化学基礎 実験②物理 田中,岩本	(教職)道徳教育の理論と方法 坂本	英語コミュニケーション1 (英会話) NF サウター	健康・スポーツ科学論 NJ *中嶋	
V限 16:20 17:50	(教職)代数学1 西村	(教職)幾何学1 吉松 [17:00-18:30]	(教職)教育心理学 平沼		ドイツ語3 NGJ *奥田,*河合 フランス語3 NGJ *本多 (教職)数学科教育法3 *村井 [17:00-18:30]

(集中) 特別ゼミナール1、英語コミュニケーション1(目的別)EGHZNPKF 松田,柏尾,上田、(教職)数学科教育法2(坂田)、(教職)地球科学(奥村、尾田)、(教職)生物実験(木村)、
(教職)教育原理(川地)、(教職)教育の方法と技術(岩山)、(教職)生徒・進路指導(平沼)

N3年 前期

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30		総合科目A群 ☆	量子力学・演習 元端	(教職)理科教育法3 *林 [理科教育法1+2を履修済のとき]	(教職)解析学1 坂田
II限 10:40 12:10	シミュレーション基礎 山原 [MC2]	総合科目A群		英語リーディング7 NEJ 柏原,*木下	計測・データ処理1 福田 [MC2]
III限 13:00 14:30	数理解モデリングゼミ 坂田,中村,竹居 科学計測ゼミ 安江,原田,津井 [MC2]	数理解モデリング 坂田	(キャリア)キャリア実践 山原	光計測工学 大野	応用サイエンス実験 坂田,安江,横井,萬代,木村 [MC2] (2教員)
IV限 14:40 16:10			英語コミュニケーション3 (英会話) NF サウター		日本電算機工学 実験①基礎電気 実験②システム 岩本
V限 16:20 17:50	☆	☆	☆		ドイツ語特別ゼミ1 *北川 フランス語特別ゼミ1 *藤井

(集中) 特別ゼミナール1(プレインタラシップゼミナール)キャリア実践、英語コミュニケーション3(目的別)EGHZNPKF 宮尾,松田,上田
(注意) 「鉄道電気」は、「特別ゼミナール(1または2)」の履修登録とともに電子工学科の科目履修の手続きを行なうこと。

N4年 前期 卒業研究

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30		総合科目A群 ☆		☆	
II限 10:40 12:10		総合科目A群			
III限 13:00 14:30		スポーツ実習4 NGJZ *村田,*勝			
IV限 14:40 16:10			基礎理工学 特別講義2 (S11R,火) はに頭		
V限 16:20 17:50	☆	☆	☆		☆

(集中) 基礎理工学特別講義2 浅倉,萬代,*川崎,*福口[4/4/3限],S11・18・1・2限,S19・20・3・4限,6/3・20・27/7・14・21(3限) (教職)教育実習1,2(事前・事後指導[土曜集中]) 川地,坂井,平沼,森石,村田
(注意) スポーツ実習4：前明火曜3限、後期金曜2限・4限のうちいずれか1コマ。

2010年度 基礎理工学科 後期授業時間割表

注意:履修の際には、「履修登録の手引き」に掲載されている時間割表を必ず参照すること。

N1年 後期

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30	微分積分1・演習 NEH 中村,上田,竹内 微分積分2・演習 NEH *田中	線形代数2 NZ 西村,*村井 (再)線形代数1 NZ 川地		基礎電気回路 奥村	英語リーディング2 NZF 山崎,*井田,*中野,*原
II限 10:40 12:10	(再)基礎解析・演習 NEH 坂田	総合科目A群 くらしと日本国憲法 足立	基礎物理学 NZ ①林内,②未定 [MC2]	基礎ゼミナール2 ①竹居,②中村,③萬代, ④大野,⑤尾花,⑥元端	力学2 原田
III限 13:00 14:30	スポーツ実習2 NZ *原住,*林,高橋	プログラミング基礎演習 山原 [MC2]	物理学実験 溝井,*奥田,*山下	物理学と先端技術 福田,大野,津井,未定	数学と工学 浅倉
IV限 14:40 16:10	コンピュータリテラシー2 NZ *松倉 [MC2]	英語リーディング4 *山本 中野語2 木子	(再)力学1・演習 NHUZ 元端		ドイツ語2 NF *山口,*横田 フランス語2 NF *村尾
V限 16:20 17:50				TOEIC特別セミナー NHU *平尾 [H22入学生のみ]	

N2年 後期

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30	応用代数学(教職)代数学2 西村	総合科目A群 環境の科学 中田 (教職)教職総合ゼミ2 岩山	電磁気学・演習 原田	コンピュータ・プレゼン テーション演習 未定 [MC2]	英語リーディング6 NE 坂本,*吉村 化学2 NG1 坂本
II限 10:40 12:10		総合科目A群		応用数学・ (教職)物理学2 吉松	電子回路 溝井 [MC2]
III限 13:00 14:30	応用フーリエ解析 萬代	現代物理学入門 福田		統計モデル入門 竹居	基礎サイエンス実験2 大野,安江
IV限 14:40 16:10	基礎理工学ゼミ2 溝井,奥村,尾花, 吉松,中村,竹居 [MC2]	(教職)理科教育法1 *林,GN (教職)教育相談・生徒指導・ カウンセリング2 平沼	英語コミュニケーション2 (英会話) NF サウター		(教職)化学実験②(物性化学 実験) 原田,*村井,*江
V限 16:20 17:50		(教職)数学科教育法1 吉松 [17:00-18:30] [MC2]			ドイツ語4 NGJ *奥田,*河合 フランス語4 NGJ *本多 (教職)数学科教育法4 *村井 [17:00-18:30]

(集中) 特別ゼミナール2、英語コミュニケーション2(目的別)EGHZNPKF 宮尾,柏原,上田、(教職)理科教育法2(*岩山)、(教職)教職総合(川地)、(教職)特別活動指導法(*岩山)
(注意) 「科学技術産業社会」は、「特別ゼミナール2」の履修登録とともにアセット・マネジメント学科の科目履修の手続きを行なうこと。

N3年 後期

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30	☆	総合科目A群		☆	数理解析・ (教職)解析学2 木村
II限 10:40 12:10	計測・データ処理2 奥村 [MC2]	総合科目A群	物性工学 安江	英語リーディング8 NEJ 柏原,*木下	
III限 13:00 14:30	計測・シミュレーション特講 元端,登尾,島田,石井, *福田,竹居		基礎理工学特別講義1 元端,福田,中田, *大倉,*飯山,*長谷川	流れ解析 山原	シミュレーション工学 溝井 [MC2]
IV限 14:40 16:10	☆	スポーツ実習3 NE *原住,*勝 ☆	英語コミュニケーション4(英会話) NF サウター ☆		英語特別ゼミ1 柏原
V限 16:20 17:50	☆	☆			☆ ドイツ語特別ゼミ2 *北川 フランス語特別ゼミ2 *藤井

(集中) 特別ゼミナール2(インタラシップ)、英語コミュニケーション4(目的別)EGHZNPKF 宮尾,松田,上田、(教職)理科教育法4(土曜集中) (*岩山) [理科教育法1+2を履修済のとき]

N4年 後期 卒業研究

	月	火	水	木	金
I限 9:00 10:30	☆	総合科目A群		☆	☆
II限 10:40 12:10		総合科目A群			スポーツ実習4 NGHIZ 高橋,*森脇
III限 13:00 14:30					
IV限 14:40 16:10	☆		☆		英語特別ゼミ2 柏原 スポーツ実習4 NIPF *奥田,*福本
V限 16:20 17:50	☆	☆			☆

(注意) スポーツ実習4：前明火曜3限、後期金曜2限・4限のうちいずれか1コマ。

履修モデル：数理モデリング志向型

	1年次		2年次		3年次		卒業要件単位
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
特別基礎科目	基礎ゼミ1	基礎ゼミ2					6
基礎専門科目	基礎理工学入門						6
数学	基礎解析・演習(2)*	微分積分1・演習(2)*	多変数の微積分*				必修3
	線形代数1	線形代数2					
理科	力学1・演習(2)	基礎物理学	熱学	現代物理学入門			選択 21~37
		力学2					
	生物学	物理学・実験(2)					
情報	コンピュータリテラシー1	コンピュータリテラシー2					必修3
		プログラミング基礎演習					
工学入門	基礎電気回路						6
専門科目	数理モデリング		確率モデル入門	統計モデル入門	数理モデリングセミナー*	流れ解析	必修17
			複素数の数学	応用フーリエ解析	数理モデリング	数理解析	選択必修 2~4
計測・シミュレーション			離散モデル入門	応用代数学			選択 27~53
			応用幾何学				
理工学イノベーション			基礎サイエンス実験1(2)	基礎サイエンス実験2(2)	応用サイエンス実験(2)		必修17
			電気回路・演習(2)	電磁気学・演習(2)	量子力学・演習		
その他					シミュレーション基礎	シミュレーション工学	選択 27~53
					計測・データ処理1	計測・データ処理2	
総合講義	A群	※1	※2	※3	※4		8~25
	B群	英語リーディング1,3 基礎英文法セミナー	英語リーディング2,4 TOEIC特別セミナー	英語コミュニケーション1(2年集中)	英語コミュニケーション2(2年集中)		12~29
C群	スポーツ実習1	スポーツ実習2	健康・スポーツ科学				3~6

4年次	卒業研究	基礎理工学特別講義2
-----	------	------------

注) 上記は履修モデルのひとつであるので、実際の履修登録や単位数については「履修登録の手引き」等でご確認ください。

履修モデル：計測・シミュレーション志向型

	1年次		2年次		3年次		卒業要件単位
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
特別基礎科目	基礎ゼミ1	基礎ゼミ2					6
基礎専門科目	基礎理工学入門						6
数学	基礎解析・演習(2)*	微分積分1・演習	多変数の微積分*				必修3
	線形代数1	線形代数2					
理科	力学1・演習(2)	基礎物理学	熱学	現代物理学入門			選択 21~37
		力学2					
	化学1	物理学・実験(2)					
情報	コンピュータリテラシー1	コンピュータリテラシー2					必修3
		プログラミング基礎演習					
工学入門	基礎電気回路						6
専門科目	数理モデリング		複素数の数学	応用フーリエ解析	数理モデリング		必修17
			確率モデル入門	統計モデル入門			選択必修 2~4
計測・シミュレーション			離散モデル入門				選択 27~53
			応用幾何学				
理工学イノベーション			基礎サイエンス実験1(2)	基礎サイエンス実験2(2)	応用サイエンス実験(2)		必修17
			電気回路・演習(2)	電磁気学・演習(2)	量子力学・演習		
その他					シミュレーション基礎	シミュレーション工学	選択 27~53
					計測・データ処理1	計測・データ処理2	
総合講義	A群	※1	※2	※3	※4		8~25
	B群	英語リーディング1,3 基礎英文法セミナー	英語リーディング2,4 TOEIC特別セミナー	英語コミュニケーション1(2年集中)	英語コミュニケーション2(2年集中)		12~29
C群	スポーツ実習1	スポーツ実習2	健康・スポーツ科学				3~6

4年次	卒業研究	基礎理工学特別講義2
-----	------	------------

注) 上記は履修モデルのひとつであるので、実際の履修登録や単位数については「履修登録の手引き」等でご確認ください。

履修モデル： 教職(数学)志向型

	1年次		2年次		3年次		卒業要件単位	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
特別基礎科目	基礎ゼミ1	基礎ゼミ2					6	
基礎専門科目	数学	基礎理工学入門					必修3 選択 21~37	
	理科	基礎解析・演習(2)*	微分積分1・演習(2)*	多変数の微積分*				
		線形代数1	線形代数2					
	情報	力学1・演習(2)	基礎物理学					
			力学2	熱学	現代物理学入門			
			物理学・実験(2)					
		コンピュータリテラシー1	コンピュータリテラシー2					
工学入門	基礎電気回路							
専門科目	数理モデリング		確率モデル入門	統計モデル入門	数理モデリングセミナー*	流れ解析	必修17 選択必修 2~4 選択 27~53	
			複素数の数学	応用フーリエ解析	数理モデリング	数理解析		
			離散モデル入門	応用代数学				
				応用幾何学				
	計測・シミュレーション		基礎サイエンス実験1(2)	基礎サイエンス実験2(2)	応用サイエンス実験(2)			
			電気回路・演習(2)	電磁気学・演習(2)	シミュレーション基礎			
	理工学インテグレーション	工学基礎実験(2)	物理学と先端技術	基礎理工学ゼミナール1	基礎理工学ゼミナール2	計測・データ処理1		計測・データ処理2
その他		数学と工学	コンピュータ・プレゼンテーション演習		基礎理工学特別講義1			
総合講義	A群	「人間発達と心理学の世界」「教育学の世界」等から選択	くらしと日本国憲法	「環境の科学」などから選択	「現代社会と青年の心理」「人間形成と教育」などから選択	教職総合ゼミ(前期or後期)	8~25	
	B群	英語リーディング1,3	英語リーディング2,4	英語コミュニケーション1(2年集中)	英語コミュニケーション2(2年集中)			
	C群	基礎英文法セミナー	TOEIC特別セミナー					
教職科目	数学・教科の指導法	スポーツ実習1	スポーツ実習2	健康・スポーツ科学			3~6	
	共通	「教職論」「教育原理」「教育心理学」「特別活動指導法」「生徒・進路指導論」「教育相談」「教育の方法と技術」「教育課程論」						

4年次 卒業研究 基礎理工学特別講義2

注) 上記は履修モデルのひとつであるので、実際の履修登録や単位数については「履修登録の手引き」で確認すること。
注) 表中の下線は教職課程関連科目を示す。

履修モデル： 教職(理科)志向型

	1年次		2年次		3年次		卒業要件単位	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
特別基礎科目	基礎ゼミ1	基礎ゼミ2					6	
基礎専門科目	数学	基礎理工学入門					必修3 選択 21~37	
	理科	基礎解析・演習(2)*	微分積分1・演習(2)*	多変数の微積分*				
		線形代数1	線形代数2					
	情報	力学1・演習(2)	基礎物理学	熱学	現代物理学入門			
			力学2					
			物理学・実験(2)					
		コンピュータリテラシー1	コンピュータリテラシー2					
工学入門	基礎電気回路							
専門科目	数理モデリング		確率モデル入門	応用フーリエ解析	数理モデリング		必修17 選択必修 2~4 選択 27~53	
			複素数の数学	統計モデル入門				
			離散モデル入門					
	計測・シミュレーション		基礎サイエンス実験1(2)	基礎サイエンス実験2(2)	応用サイエンス実験(2)	光計測工学		
			電気回路・演習(2)	電磁気学・演習(2)	科学計測ゼミナール*	物性工学		
				電子回路	計測・データ処理1	計測・データ処理2		
					シミュレーション基礎	シミュレーション工学		
理工学インテグレーション	工学基礎実験(2)	物理学と先端技術	基礎理工学ゼミナール1	基礎理工学ゼミナール2		基礎理工学特別講義1		
その他		数学と工学	コンピュータ・プレゼンテーション演習					
総合講義	A群	「人間発達と心理学の世界」「教育学の世界」等から選択	くらしと日本国憲法	環境の科学	「現代社会と青年の心理」「人間形成と教育」などから選択	教職総合ゼミ(前期or後期)	8~25	
	B群	英語リーディング1,3	英語リーディング2,4	英語コミュニケーション1(2年集中)	英語コミュニケーション2(2年集中)			
	C群	基礎英文法セミナー	TOEIC特別セミナー					
教職科目	数学・教科の指導法	スポーツ実習1	スポーツ実習2	健康・スポーツ科学			12~29	
	共通	「教職論」「教育原理」「教育心理学」「特別活動指導法」「生徒・進路指導論」「教育相談」「教育の方法と技術」「教育課程論」						
教職科目	理科・教科の指導法			生活化学実験(2) @G	化学2 @G		3~6	
				理科教育法 1, 2, 3, 4				
				生物学実験(夏期集中)				
				地球科学・地学実験(夏期集中)				
共通	「教職論」「教育原理」「教育心理学」「特別活動指導法」「生徒・進路指導論」「教育相談」「教育の方法と技術」「教育課程論」							

4年次 卒業研究 基礎理工学特別講義2

注) 上記は履修モデルのひとつであるので、実際の履修登録や単位数については「履修登録の手引き」で確認すること。
注) 表中の下線は教職課程関連科目を示す。

2009 年度 学科教育点検・評価（FD）報告書提出のお願い

昨年度から実施しておりますが、本年度も各学科において実施している学科教育の点検・評価（FD）についてのご報告をよろしくお願い申し上げます。学科会議などでのいろいろな観点から点検・評価の活動をされていることと思いますが、昨今それらの取り組みや成果・課題などを学内のみならず学外にも広く伝える必要があります。また、今年度より文部科学省補助金の「私立大学等経常費補助金」の申請内容が大幅に変更され、補助金の申請要件の中には、自己評価の情報公開が条件となっているものがあります。本報告書をもとに学科教育の点検・評価（FD）の結果を学内で公開し、さらに Web 上でも公開して広く公表する予定にしております（昨年度のものは大学 HP のトップページの JIHEE のロゴをクリックしていただくと見ることが出来ます）。なお、情報公開に当たり、学生や教職員個人のプライバシーなどを考慮した上で公開する予定ですので、できうるかぎりでご配慮をお願いします。提出期限は 4 月末日といたしますのでよろしくお願い致します。

教育開発推進センター長
萬代 武史

